



史跡

平出遺跡

—平成14年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る発掘調査報告書—

2004年3月

塩尻市教育委員会

目 次

1	発掘調査に至る経緯	1
2	発掘調査の目的と方法	2
3	遺跡の層序	5
4	調査概要	5
5	遺構と遺物	7
6	縄文時代の古環境と食糧等への利用状況	38
7	「縄文の村」地区の整備計画	39
8	まとめ	43

例言・凡例

- 1 本書は、史跡平出遺跡記念物保存修理事業（環境整備）に係わる発掘調査報告書である。
 - 2 発掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、塩尻市教育委員会が実施した。
 - 3 発掘調査は、平成14年7月11日から平成15年3月28日まで行った。
整理作業は、平成14年3月1日から平成16年3月31日まで行った。
 - 4 調査指導
塩尻市史跡平出遺跡整備委員会
委員長 戸沢 充則（明治大学名誉教授）
副委員長 樋口 昇一（長野県文化財保護審議会委員）
委員 桐原 健（長野県考古学会会長）
宮本長二郎（東北芸術工科大学教授）
佐々木邦博（信州大学農学部教授）
辻 誠一郎（国立歴史民俗博物館教授）
 - 5 本書の執筆・編集
小林康男、小松学、塩原真樹、中野実佐雄、パリノ・サーヴェイ株式会社
 - 6 本報告書に係る出土品・諸記録は、塩尻市立平出博物館で保管している。
-

1 発掘調査に至る経緯

(1) 国史跡指定と現在までの調査の歩み

平出遺跡は、昭和25・26年に大規模な発掘調査が実施された。この発掘調査によって、縄文中期17、後期1、古墳～平安49の住居址と古墳～平安の掘立柱建物址3が発見され、これらの遺構にともなって縄文土器・石器・古代の土器・鉄器・自然遺物などが大量に出土した。これにより縄文時代中期から平安時代の大集落遺跡であることが明らかとなり、この地域の原始・古代研究の基礎的資料を提供することになった。

このような成果により、昭和27年3月29日、約15ha が国史跡に指定された。

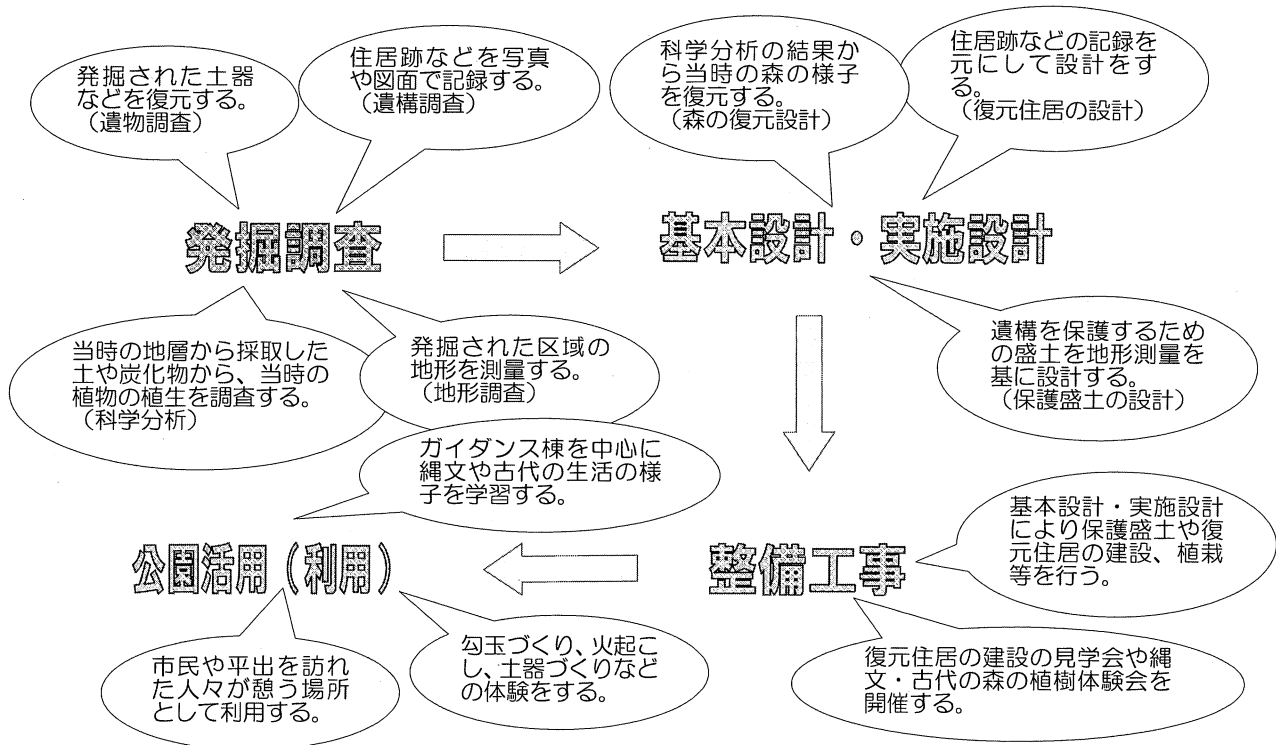
昭和52年、「史跡平出遺跡保存管理計画書」が策定され、永久保存地区・現状変更許容地区のエリア設定、用地の公有化および整備・活用の推進など保存管理の基本的方針が決定された。

この計画に基づき、塩尻市では、平成9年度から平成22年度までの継続事業として永久保存地区を中心とした約7.3ha の用地の公有化事業に着手した。平成11年度には塩尻市史跡平出遺跡整備委員会（委員長 戸沢充則）を発足し、整備・活用計画の検討を進め、平成13年度に整備基本計画を策定した。整備基本計画では、平出遺跡およびその周辺に、「導入部」「縄文の村地区」「古代の農村地区」「ガイダンス地区」「体験学習施設地区」の5地区を設定し、平成15年度から順次整備を進めることになった。

平成14年度には、「縄文の村」の復元住居・地形復元・植生などの整備の資料を得るため、国庫・県費の補助を受けて「縄文の村生活復元エリア」で1,500㎡の発掘調査を実施することした。

(2) 発掘調査の位置づけ

発掘調査から史跡整備まで



2 発掘の方法と経過

(1) 目的と方法

平出遺跡では昭和20年代から発掘調査が行われているが、それらの調査はグリッドやトレンチによる、点や線の調査であり、広範囲にわたる面的な調査は行われたことがなかった。このため史跡整備を行うためには情報量が乏しく、塩尻市教育委員会では平成14年度から国庫及び県費補助を受け、平出遺跡整備のための面的な事前発掘調査を始めた。

今回の調査地区は、「縄文の村」整備地区を対象とし、復元住居址の選定、遺構保護盛土厚の算定、植栽の樹種選定など「縄文の村」整備に必要な資料を得ることを目的として発掘調査が行われた。

調査区の設定は、平成13年度に実施した遺構確認調査及びこれまでに行われた発掘調査から掌握されている遺構の分布状況をもとに、1,500㎡の範囲を設定した。また、調査区内には測量等のために3m間隔でグリッド杭を打った。

発掘調査ではより多くの情報を得るため、表土からすべて人力による掘り下げを行い、なるべく高い位置での遺構の検出に努め、当時の生活面の把握を重視した。

遺物の取り上げに関しては、住居内から出土した遺物は位置を記録して取り上げたが、埋甕炉に使用された炉体土器は遺構の一部であるとの解釈のもと、遺構保護の観点から記録をとった後に住居址とともに埋め戻した。

なお、調査では今後の再調査も念頭に置き、必要最低限の調査にとどめたため、検出住居址以外の土坑等、調査区内に未掘部分も多く残されていることを明記しておきたい。また、遺構の埋め戻しにおいては住居址内に遺構保護のために砂を入れてから、その上に土を入れる方法をとった。

(2) 調査の経過

発掘機材の搬入およびビニール紐による調査区の設定を行い、7月11日から調査を開始する。

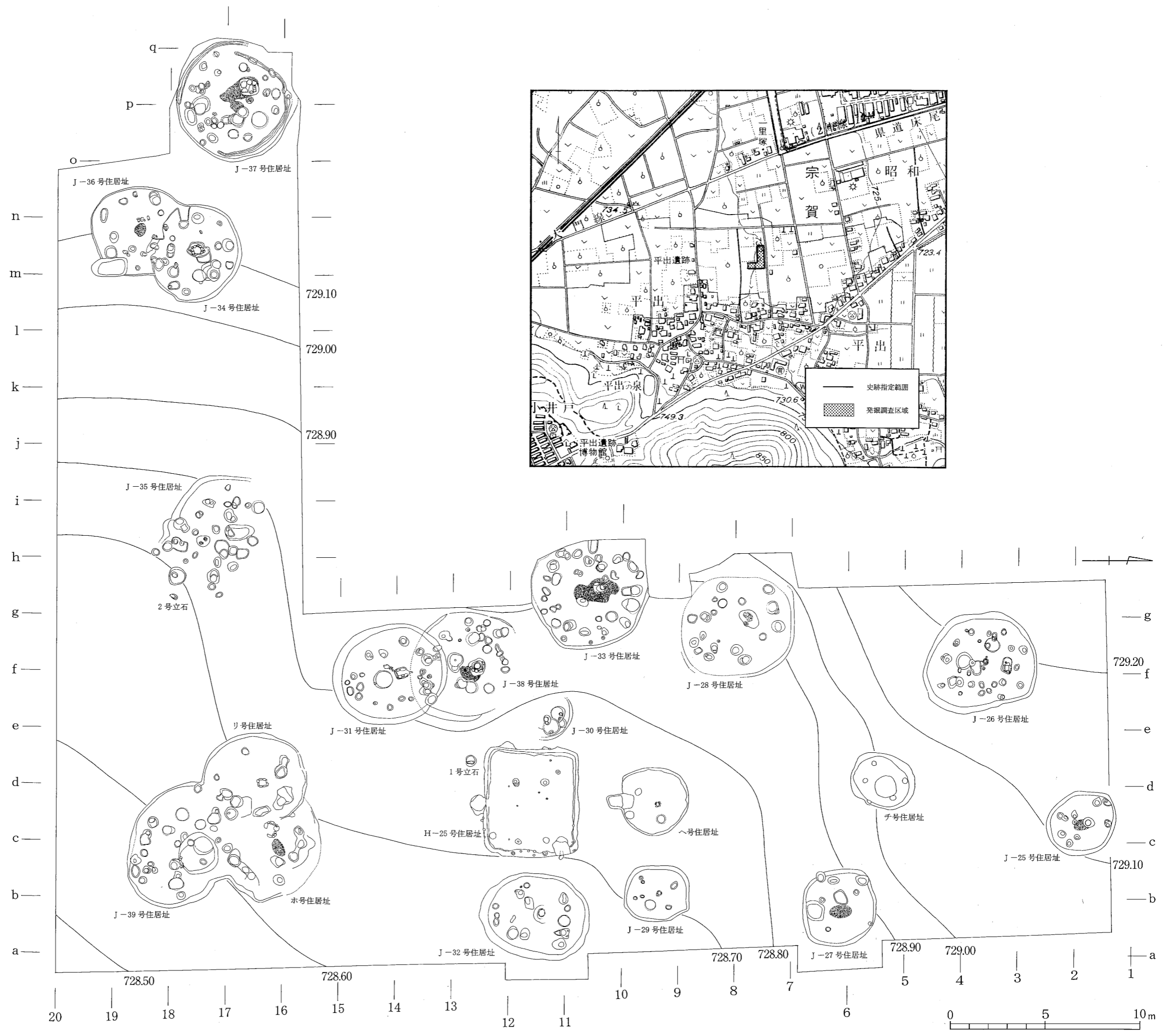
表土である耕作土も重機等を使用せず手作業で取り除くため、表土除去作業の進捗状況は思わしくない。しかも表土中からも遺物が頻繁に出土するため、慎重に作業を行う。耕作は地表面より約30cmまでおよんでおり、耕作土の下には暗褐色土層が堆積し、この層が遺構確認面となる。この遺構検出作業により、通常はローム面上で遺構が検出されるが、これより上位の暗褐色土層から遺構が確認され、また現在ではほぼ平坦にみえる地形も旧地形は多少起伏があったことがわかるなど、人力作業により表土から掘り下げを行ってきた成果が多く認められた。

遺構検出により確認された住居址は20軒あったが、これらのうち5軒は昭和26年に既に調査されているが、再検証のためそれらについても調査を行った。住居址の調査は通常の調査同様、セクションベルトを設定してから掘り下げを行い、遺物は出土状況の詳細な記録を取ってから取り上げをした。

住居址完掘後は写真や平面図等の記録を取り、調査区周辺も含めた全景写真はラジコンヘリにより空中から撮影をおこなった。

すべての調査を完了した後は、住居址内に砂を入れ、遺構を保護した。

3月28日、発掘機材を撤収し調査を終了する。



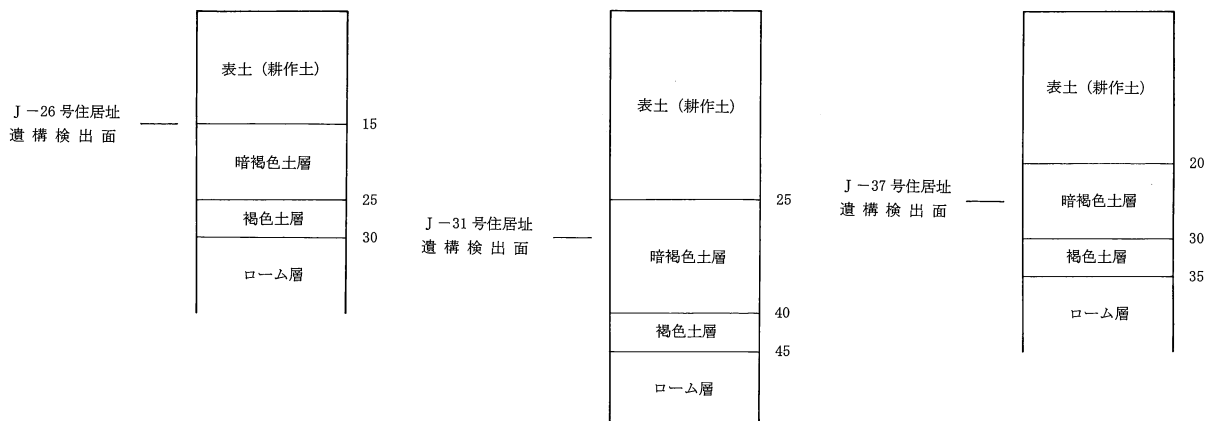
第1図 発掘調査全体図

3 遺跡の層序

発掘調査区域周辺は、西側から東側に向けて緩やかな傾斜がみられるが、現況ではほぼ平坦な印象を受ける。調査によって明らかになった旧地形をみると、現地形とはやや異なり、若干の高低差をもちながら南側を流れる渋川に向かうように東南方向に傾斜していることが判った。よって現地表面からローム面までの高さは場所によって多少の相違がみられたが、基本層序は、表土（耕作土）→暗褐色土層→褐色土層（漸移層）→ローム層となり、耕作が浅い場所では部分的に暗褐色土層の上に黒褐色土層が薄く堆積しているのが確認された。

今回の史跡整備にともなった発掘調査では、遺構の掘り下げがどの面から行われているのか、当時の生活面がどの位置にあったのか把握することに努めた。調査を進めた結果、暗褐色土層から住居址の掘り込みが確認され、暗褐色土層内に生活面が存することが確認された。

このような成果にもとづき、史跡整備にあたっては当時の生活面を基準とし、保護のための盛土厚を算定することとした。



第2図 層序

4 調査概要

平成14年度調査で検出された遺構は、縄文時代中期初頭～後葉の住居址が19軒、平安時代の住居址が1軒である。この他に縄文中期と考えられる立石が2基確認された。

今回の調査を実施した区域内には、昭和26年の平出遺跡第2次調査時の1トレンチが該当しており、確認された20軒の住居址のうち、縄文中期に比定されるチ・ヘ・ホ・リ号住居址と平安時代のH-25号住居址の5軒はこの時に既に確認されており、今回これらの住居址に関しては、約50年ぶりの再調査となった。

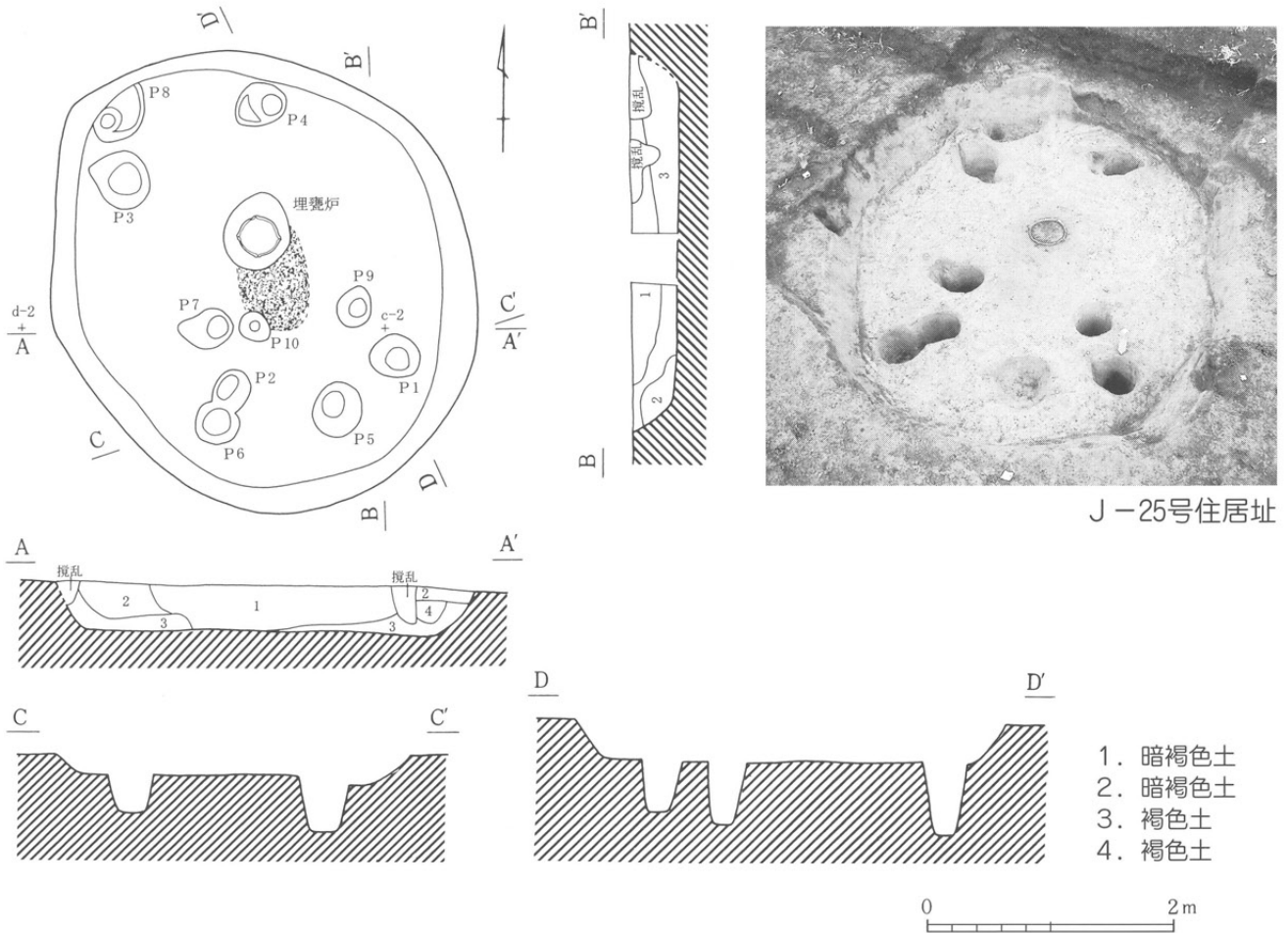
遺物では、吹上パターンを呈する住居址が多くみられ出土量も多く、J-31・32号住居址にいたっては復元可能な土器が数十個体以上も出土している。

また、土偶、土鈴、耳飾、スプーン形土製品などの土製品も多く出土し、特に土偶の出土は50点で、これまでに平出遺跡から出土した土偶と合わせると、松本平の縄文中期土偶が出土した遺跡の中でも有数である。また、出土した土偶が4軒の住居址間で接合するという非常に稀な例もみられ、今後大いに注目されるであろう。

住居址一覧表

住居址名	所属時期	住居形態	規模 (m)	炉	出土遺物	備考
J-25号	縄文中期中葉 (新道期)	楕円形	3.9×3.4	埋甕炉	土器、石器 (打製石斧・磨製石斧)、土偶	J-29号出土土偶と接合
J-26号	縄文中期中葉 (新道期)	楕円形	6.3×5.2	石囲炉・埋甕炉	土器、ミニチュア土器、石器 (打製石斧)、土偶、耳栓	土偶20点出土
J-27号	縄文中期中葉 (中期初頭)	円形	3.8×4.2	地床炉	土器、ミニチュア土器、石器 (石鏃・打製石斧・不定形石器)、土製円盤	
J-28号	縄文中期中葉 (井戸尻 I 期)	楕円形	6.0×5.2	地床炉	土器、ミニチュア土器、石器 (打製石斧、磨製石斧、凹石、敲石、不定形石器)、土偶、土鈴、耳栓	
J-29号	縄文中期中葉 (新道期)	楕円形	3.5×3.0	石囲炉	土器、石器 (石匙、凹石、不定形石器)、土偶	J-25号出土土偶と接合
J-30号	縄文中期中葉 (猪沢期)	不明	不明	埋甕炉	土器、石器 (打製石斧)、土偶	土偶5点出土 J-31・32・33号住居址の土偶と接合
J-31号	縄文中期中葉 (藤内 I 期)	楕円形	6.2×5.2	石囲炉	土器、ミニチュア土器、石器 (石鏃・石匙・石錐・打製石斧・磨製石斧・石皿・凹石・石錘) 土錘、土偶	典型的な吹上パターン J-30・32・33号住居址の土偶と接合 J-38号住居址に切られる
J-32号	縄文中期中葉 (新道期)	楕円形	5.9×4.5	埋甕炉	土器、ミニチュア土器、石器 (石鏃・石匙・打製石斧) 土鈴、土偶、スプーン形土製品	典型的な吹上パターン J-30・31・33号住居址の土偶と接合
J-33号	縄文中期中葉 (井戸尻 I 期)	円形	(6.0×6.0)	石囲埋甕炉・埋甕炉	土器、石器 (打製石斧、磨製石斧、不定形石器)、土偶	J-30・31・32号住居址の土偶と接合
J-34号	縄文中期中葉 (井戸尻 I 期)	円形	4.8×5.2	石囲炉	土器、石器 (石皿・敲石・不定形石器)、土偶	J-36号住居址を切る
J-35号	縄文中期中葉 (藤内 I 期)	楕円形	(5.0×6.0)	地床炉	土器、土偶	
J-36号	縄文中期中葉	円形	(4.8×4.8)	地床炉	土器、石器 (石皿・敲石・磨石)	J-34号住居址に切られる
J-37号	縄文中期後葉 (曾利 I 期)	円形	(6.5×6.5)	石囲炉	土器、石器 (石匙・打製石斧・凹石・敲石)	
J-38号	縄文中期中葉 (井戸尻 I 期)	円形	(5.5×5.5)	石囲埋甕炉	土器、石器 (石鏃・石錐)、土製円盤	J-31号住居址を切る
J-39号	縄文中期中葉 (井戸尻 I 期)	楕円形	6.8×5.2	石囲炉	土器、石器 (石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧、凹石、不定形石器)	ホ・リ号住居址と重複
チ号	縄文中期後葉	楕円形	3.5×2.9	不明	土器、石器 (打製石斧)	昭和26年に調査
ハ号	縄文中期中葉 (新道期)	円形	5.0×5.0	石囲埋甕炉	土器、石器 (石鏃)	昭和26年に調査
ホ号	縄文中期中葉	円形	(5.6×5.6)	石囲炉	土器、石器 (石匙・石皿)	昭和26年に調査
リ号	縄文中期中葉	楕円形	(6.0×4.0)	石囲炉	土器、石器 (打製石斧)	昭和26年に調査
H-25号	平安時代	長方形	4.6×5.6	カマド (東壁北寄)	土師器、灰釉陶器	昭和26年に調査

5 遺構と遺物



第3図 J-25号住居址

J-25号住居址 (第3図)

遺構 本址は調査区の北端に位置している。耕作により攪乱されている表土を少しずつ掘り下げていくと25cm 下位に暗褐色土層が認められ、住居は暗褐色土層上面にやや色調の異なる個所として確認することができた。この住居址が確認できた面は、耕作等により多少なりとも壊されている可能性はあるものの、およそ遺構が掘り込まれた面としてとらえられ、つまりは当時の人々の生活面として考えられる。

住居址範囲を確認後、東西、南北にベルトを設定し、住居址の掘り下げを行った。遺物は暗褐色土層中から多く出土し、北および南壁際では床面より10~20cm ほど上がった位置で土器が潰れるように出土するのが確認された。

本址は、南北3.9m、東西3.4m の楕円形を呈するやや小形の住居址で、中央やや北寄りに埋壺炉が設けられている。住居の掘り込みはローム層まで達し、周壁はやや傾斜をもって掘り込まれ、暗褐色土層中の確認面までの壁高は15~30cm となっている。周壁際には周溝はなく、床面は平坦で堅緻なつくりをしている。また、埋壺炉付近の床面には焼土がみられたが、この焼土は北側には広がらず埋壺炉から



J-25号住居址埋甕炉



J-25号住居址出土土器

南側に伸びるように広がっていた。

住居内からは9本の柱穴が検出され、その状況から1度建替えが行われたと考えられる。1期の住居はP2、P3、P4、P9の4本を支柱穴として使用していたと思われる。2期はP1、P3、P4、P6の4本が支柱穴として使用されたとみられ、1期よりも南側に拡張されている。

本址は、埋甕炉の炉体土器および住居内出土土器から、縄文時代中期中葉Ⅱ（新道）期と考えられる。**遺物** 土器は床面より10~20cmほどの高さの暗褐色土層中から比較的まとまって出土している。数量的には多くなく、時期的には縄文時代中期中葉Ⅰ・Ⅱ（貉沢・新道）期の土器がみられ、平出三類A土器も含まれていた。器形的には深鉢が主体であり、大形で無文の浅鉢なども出土している。炉体土器は口縁~胴部まで残っており、遺存状況は良好であった。中期中葉Ⅰ期の様相を色濃く残しているが、文様などからⅡ期に比定されるであろう。石器は打製石斧、磨製石斧などが出土しているが数的には多くない。また、床面からやや浮いて土偶の胴部も1点出土しており、この土偶はJ-29号住居址から出土した土偶の頭部と接合している。

J-26号住居址（第4図）

遺構 本址は調査区の北西に位置している。調査区内でも高い位置にあたり、旧地形時においても高い地域であったため、耕作土を取り除くとすぐに暗褐色土層中に住居址の輪郭があらわれた。他の住居址と比べやや大形であったため、どのような遺構でどんな遺物が出土するのか調査前から多いに期待が寄せられた住居址であった。

遺構範囲を確認後、東西、南北にベルトを設定し、掘り下げを行った。

調査を進めていくと、南北ベルトの中央付近の土層セクションに遺構検出時には確認できなかった落ち込みが確認され、その後の調査で建替えられた住居址の周壁部分にあたと確認された。

本址はこの1回を含め、2回の建替えが行われ、3期にわたり住居が営まれたことが、土層の堆積状況や柱穴の配置、炉の位置関係などから判った。

このうち当初につくられた1期の住居址は、P3、P10、P11、P15、P21、P22、P25、P27の8本が柱穴として想定することができ、中央に埋甕炉が設けられている。2期は住居が北側に拡張され、P1、P2、P5、P11、P16、P18、P23の7本が主柱穴として使用されていたと考えられる。住居中央には1期の埋甕炉を切るようにして、すぐ北側に1期のものよりやや大きな埋甕炉がつくられている。この2期の住居址が3期のなかでも最も大きくつくられていた時期にあたる。最終である3期になると住居址は北寄りに移り、P1、P2、P7、P24、P26、P32の6本が主柱穴として使われていたと考えられる。炉はそれまでの埋甕炉とは異なり、住居中央やや北寄りに石囲炉がつくられていた。

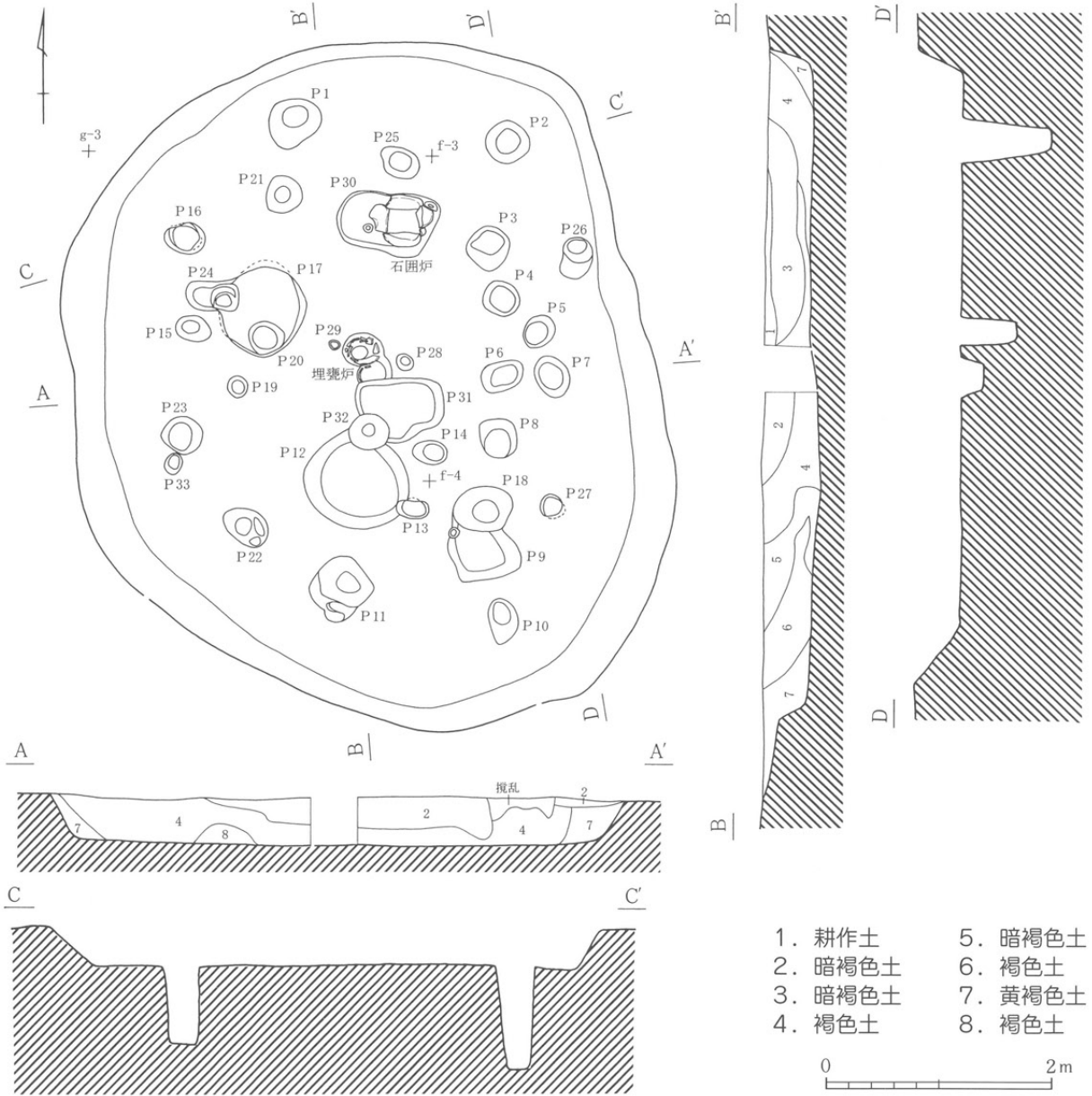
最終的に掘りあがった遺構は、南北6.3m、東西5.2mの楕円形を呈する今回の調査では最も大きい住居址であり、住居内には33本のピットが残され、壊されてしまっていた2つの埋甕炉としっかりした形で残されていた1つの石囲炉が検出された。周壁はやや傾斜をもって掘り込まれ、暗褐色土層の確認面までの壁高は、40～50cmとなり、周壁際に周溝などは確認されなかった。また、床面は段差等がなく平坦で堅緻であった。

本址は、住居内出土土器から、縄文時代中期中葉Ⅱ（新道）期と考えられる。

遺物 土器は縄文時代中期中葉Ⅰ・Ⅱ（貉沢・新道）期のものがみられるが、主体となるものはⅡ期である。器形的には深鉢が主体であるが、浅鉢もみられた。

出土遺物で特筆すべきは土偶の多さであり、住居内からは20点のもの土偶が出土した。内訳は頭部5点、手1点、腹部2点、胴部9点、脚部3点となっている。このうち3点が接合でき、頭部から脚部付近までがつながった。これをみると、小さな頭に対し体が大きく作られており、全体的にバランスは悪い印象を受ける。部分的にみると、頭部の土偶では5点のうち4点が、頭部が平らになっている、いわゆる河童形土偶であった。手は短く真横に伸びている。腹部および胴部では、腹が膨らんだ妊娠土偶が目立っている。尻の張り出しは顕著ではない。足は短くてあまり大きくはないようである。

また、全面に朱を塗った直径1cm、長さ1cmという非常に小さな耳栓やミニチュア土器なども出土している。石器は少なく、打製石斧が出土しているにすぎない。



第4图 J-26号住居址



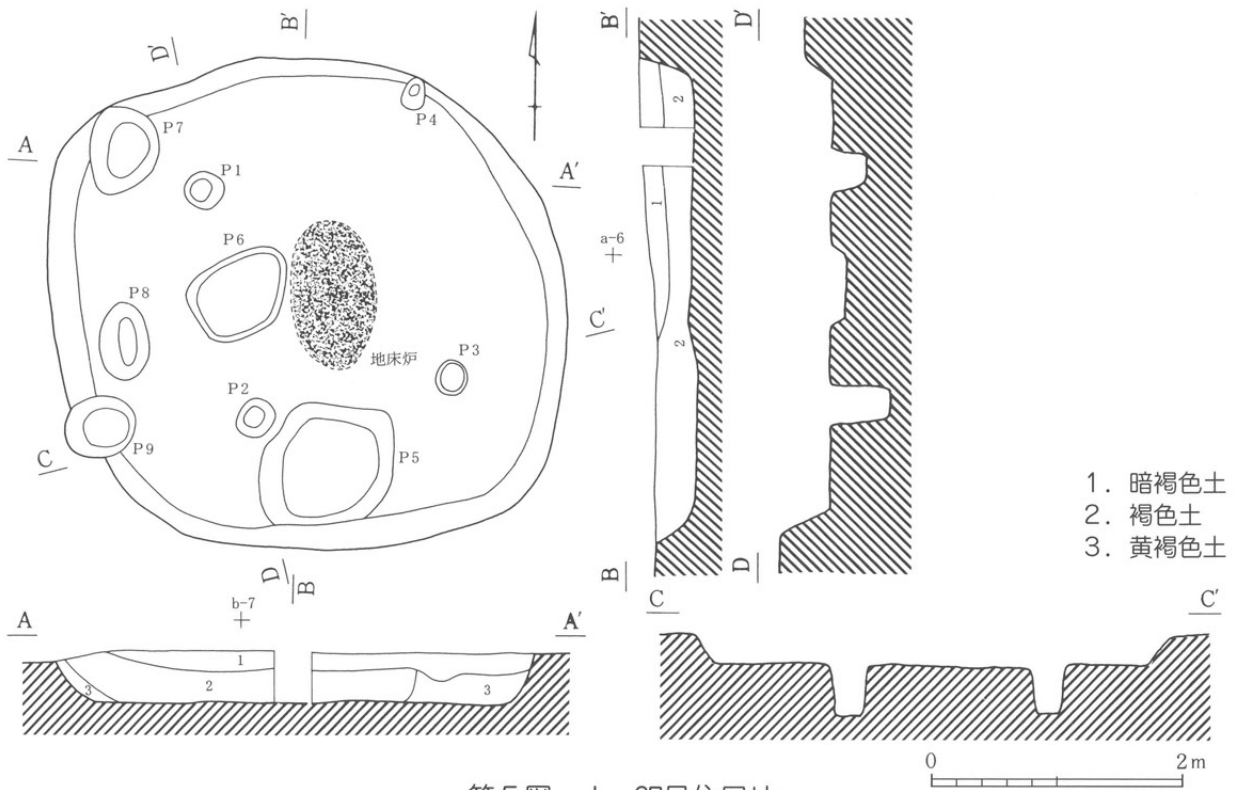
J-26号住居址



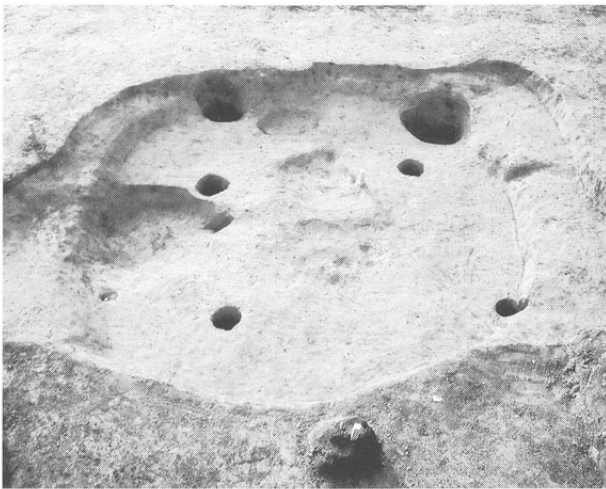
J-26号住居址出土土器



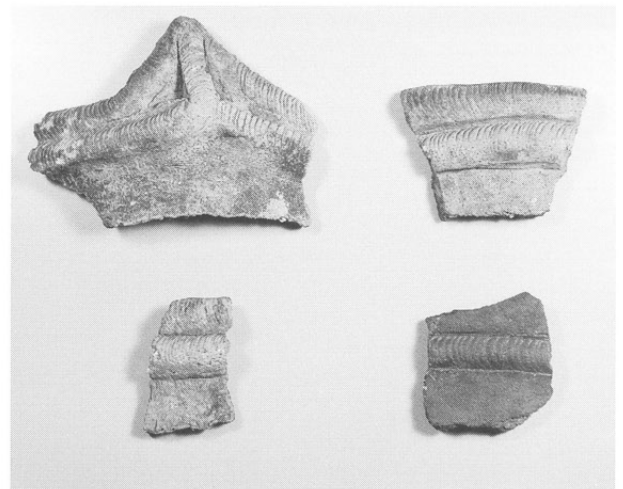
J-26号住居址出土土偶
(左端 住居址内3ヶ所から出土したものが接合)



第5図 J-27号住居址



J-27号住居址



J-27号住居址出土土器

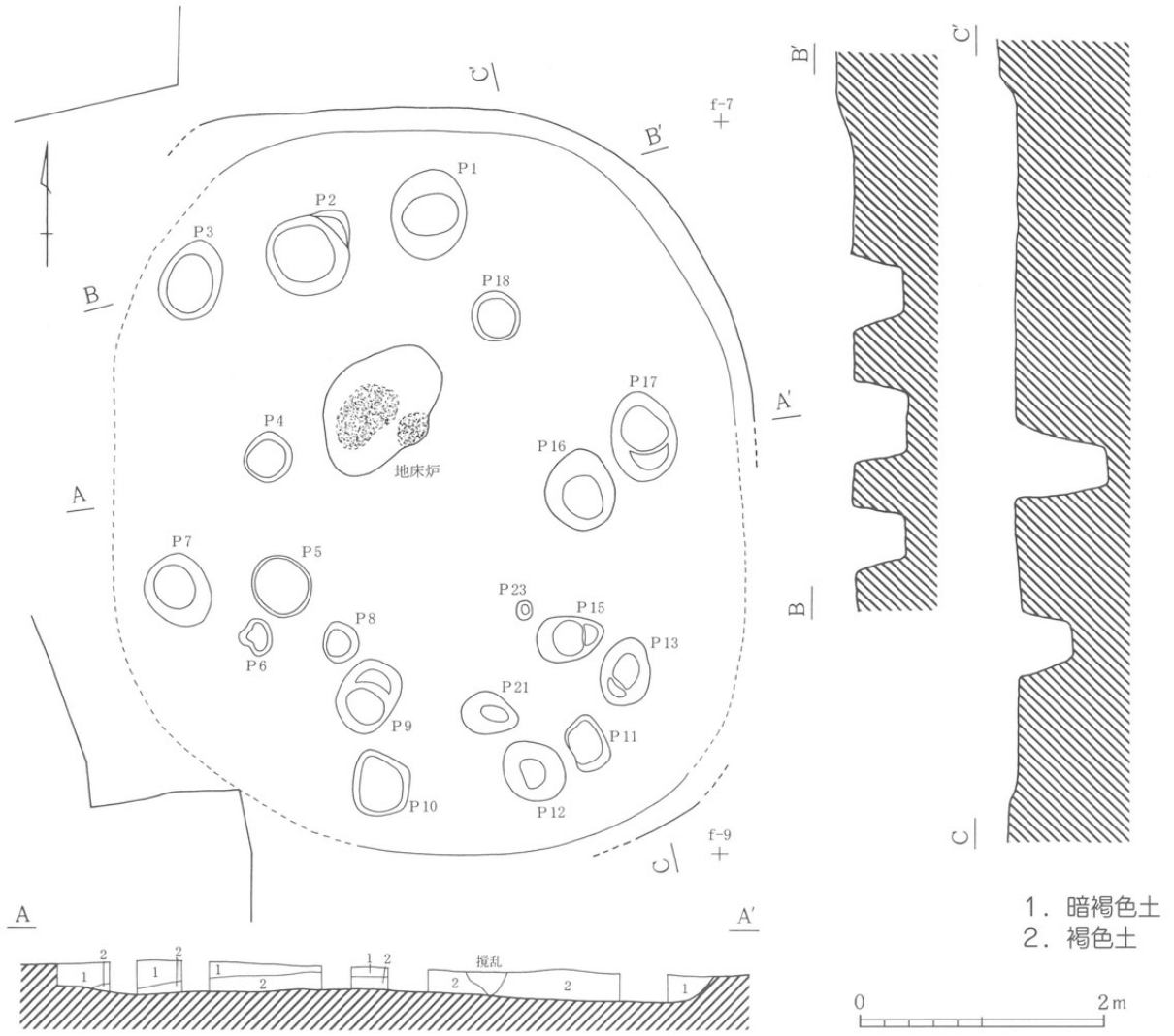
J-27号住居址 (第5図)

遺構 本址は調査区の北東に位置している。南北3.8m、東西4.1mのほぼ円形を呈し、床は平坦で堅くしまっている。壁はローム層を掘り込んでおり、立ち上がりは比較的急である。当時の生活面と思われる暗褐色土層までの壁高は、20~40cmとなっている。

住居内からは大小9ヶ所のピットが検出されたが、そのうちP1~P3が支柱穴であると考えられる。炉は中央部を5cmほど掘りこんだ地床炉で、その周辺に焼土が堆積している。

出土遺物から、本址は縄文中期初頭のものと考えられる。

遺物 出土遺物は非常に少なく、器形復元の可能な土器は1点もなく、破片のみの出土であった。この中には東海地方を中心に分布している縄文時代中期初頭の北裏C式土器も含まれている。また、ミニチュア土器や土製円盤なども出土している。石器では石鏃、打製石斧、不定形石器が出土している。



第6图 J-28号住居址



J-28号住居址



J-28号住居址出土土器



J-28号住居址出土石器

J-28号住居址（第6図）

遺 構 調査区北西に位置する比較的大きな住居址で、南北6m、東西5.2mの楕円形を呈する。

住居西側から中央部にかけての遺構確認面より15cmほど下がった褐色の覆土中からは大量の土器が出土した。

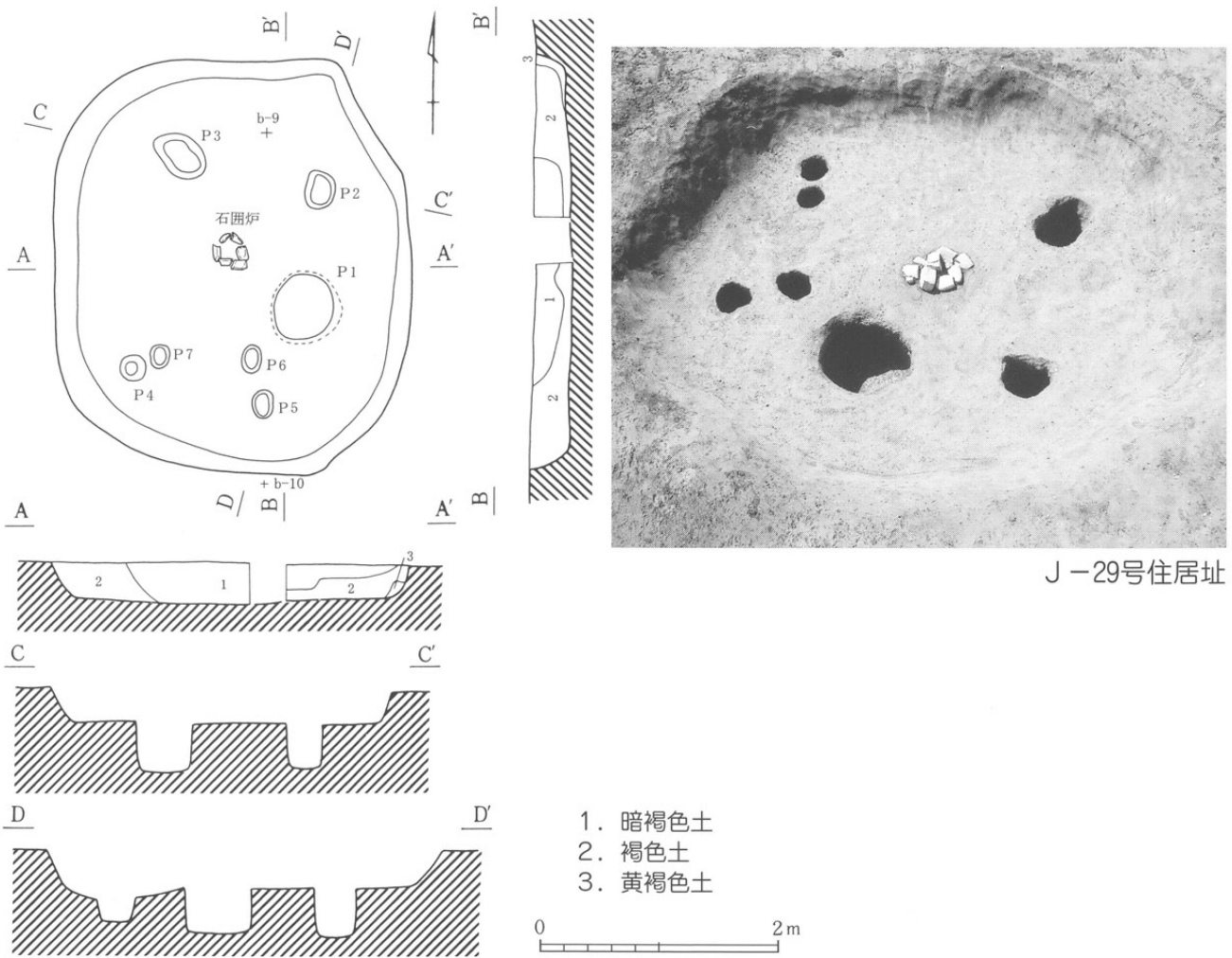
床はやや起伏があり、状態も悪い。壁は北側から東側の一部にかけて残されており、高さ20cmの壁が検出されたが、他の部分からは立ち上がりは確認できなかった。ピットは内部に計20ヶ所が検出されたが、主柱穴と特定できるものはP1、P3、P7、P10、P13、P17の6本である。

そのほか住居内中央西寄りに地床炉が検出された。

この住居址は出土遺物から縄文時代中期中葉V（井戸尻I）期と考えられる。

遺 物 住居址の半分が攪乱により床面付近まで破壊されていたが、覆土が残されていた東半部からは吹上パターンを呈するような状況で土器が出土したため、多くの遺物が出土している。土器は中期中葉V（井戸尻I）期が主体で、伊那地方の地域色の強い下伊那タイプといわれるものや焼町土器なども出土している。また、土偶、ミニチュア土器、土鈴、耳栓が各1点出土している。

石器では、打製石斧、磨製石斧、凹石・磨石、敲石、不定形などが出土している。



J-29号住居址

第7図 J-29号住居址

J-29号住居址（第7図）

遺構 本址は調査区中央の東寄りに位置している。

暗褐色土層中で住居址の範囲を確認後、東西、南北にベルトを設定し、住居の掘り下げを行った。

本址は南北3.5m、東西3mの楕円形プランを呈する小形の住居址で、今回の調査で検出された住居址でも最小クラスである。床は平坦で堅緻であり、周壁はやや傾斜をもち暗褐色土層から掘り込まれている。周壁の高さは30～35cmを測り、住居内から7ヶ所の柱穴が検出された。

柱穴の形状や配置から建替えが行われたと考えられる。1期はP2、P3、P5、P7が支柱穴であろう。2期はやや南側に住居が拡張され、P2、P3、P4、P5が支柱穴として使用されていたと考えられる。両期ともに同じ石囲炉を使用していたらしく、他には炉の痕跡は認められなかった。この石囲炉は1辺30cmほどで規模が小さく、形状は6ヶの礫を用い円形を呈している。炉底は10cmほど掘りくぼめられており、炉の内部に焼土が認められた。また炉の周辺にも焼土は認められるものの、量的には少ない。

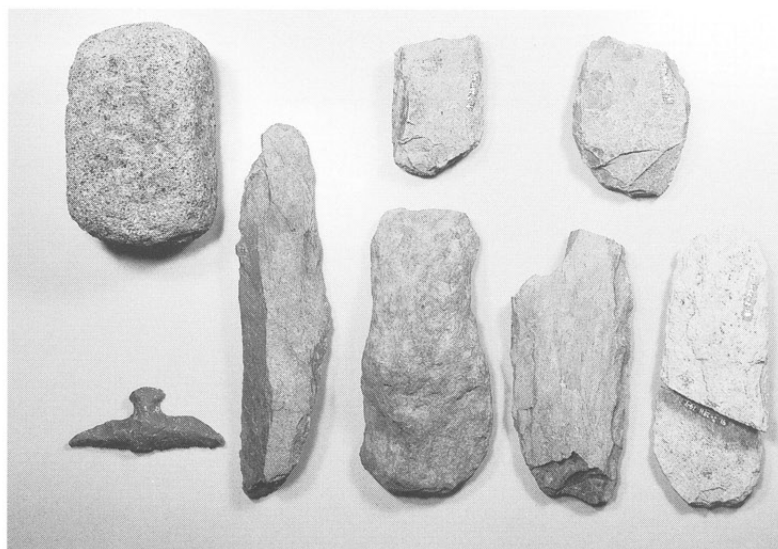
本址は、出土土器から、縄文時代中期中葉Ⅱ（新道）期と考えられる。



J-29号住居址出土土器



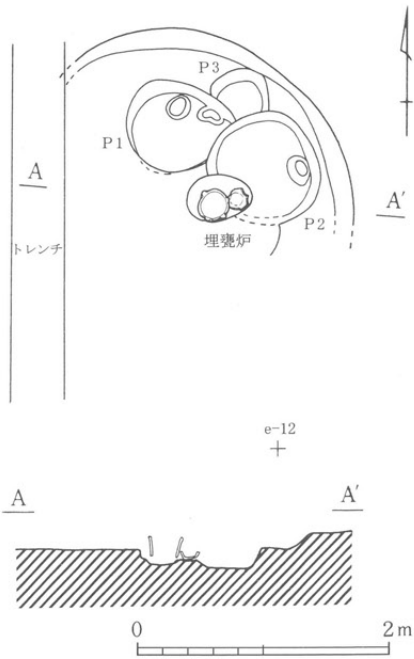
J-29号（頭部）とJ-25号（胴部）
の接合した土偶



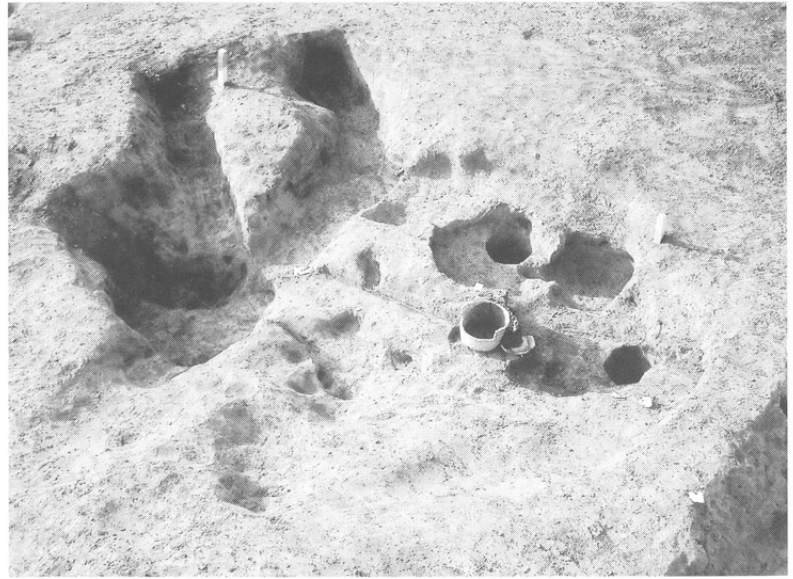
J-29号住居址出土石器

遺物 出土量はそれほど多くないが、縄文時代中期中葉Ⅱ期の土器が主体を占めている。復元可能な土器も床面から10~20cm 浮くようにして出土している。数は少ないが吹上パターンといえるであろうか。この中には平出三類A土器も含まれていた。土偶の胴部が1点出土しているが、J-25号住居址から出土した頭部と接合し、注目される。

石器では、打製石斧が主体であるが石匙、磨石・凹石、不定形石器なども出土している。



第8図 J-30号住居址



J-30号住居址

J-30号住居址出土土器
(右 炉体土器)

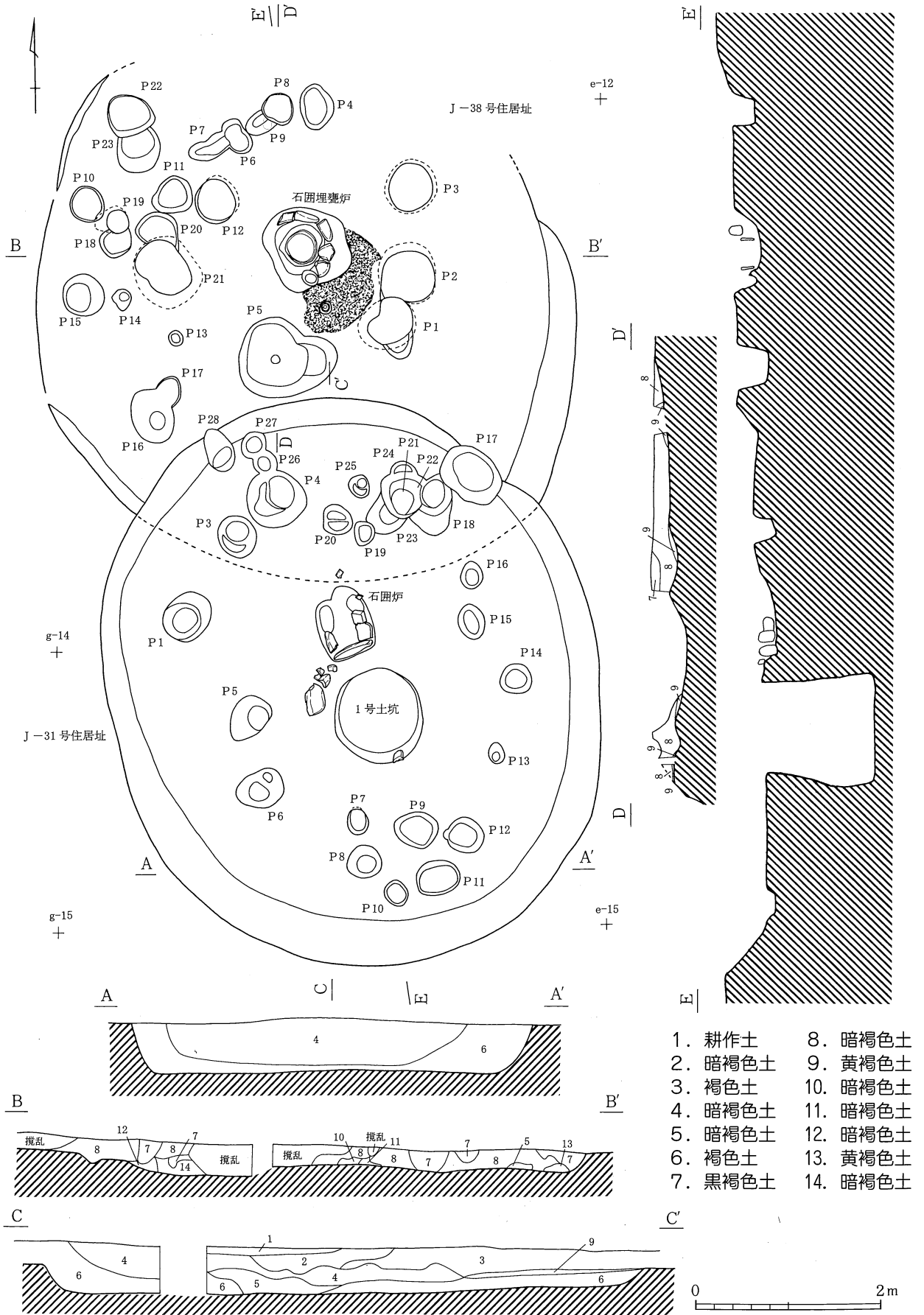
J-30号住居址 (第8図)

遺構 本址は調査区の中央付近に位置している。遺構検出作業で不明瞭ながら暗褐色土層中に住居址の輪郭があらわれたが、実際に掘り下げをしていくと風倒木痕と思われるような痕跡や他の攪乱等により住居址の大部分が破壊されていることが判明した。そのため住居の周壁は確認できず、わずかに床面と埋壺炉が残存しているのみである。そのため住居址の規模や形態などは不明である。床は埋壺炉の周辺に部分的に残っていたが、平坦ではあるがやや締まりにかけている印象を受けた。この他にピットや土坑なども検出されたが、支柱穴の特定にはいたらなかった。

本址は、炉体土器などからみて、縄文時代中期中葉I（貉沢）期と考えられる。

遺物 既述のように住居址の残存状況が著しく悪かったため遺物の出土量も少ない。しかし炉体土器はしっかり残されており、また、壺形の有孔鏝付土器も出土している。破壊が著しい住居址であったにもかかわらず、土偶が5点も出土し注目される。このうち1点はJ-31・32・33号住居址出土の土偶と同一個体と考えられ、土偶の取り扱い方を考えるうえで好資料となろう。

石器では、打製石斧が出土している。



第9图 J-31号·J-38号住居址



J-31号住居址

J-31号住居址（第9図）

遺構 本址は調査区の中央やや南寄りに位置し、J-38号住居址に北側の周壁の一部を破壊されている。しかし、周壁の上部のみが破壊されていたため、住居址の規模は南北6.2m、東西5.2mの楕円形プランの住居址であることが確認できた。掘り込みは約50cmで、周壁はやや緩やかに立ち上がっている。周溝は確認されなかった。また、住居中央付近には石囲炉が設けられていたが、炉の北辺は炉石がなく、その部分を掘り下げると石の抜き取り痕が確認できた。

住居内のピットの配列などをみると、P1、P3、P4、P5、P6、P7、P8、P12、P14、P21、P23などが深さや形態などから柱穴と考えられ、P1、P6、P8、P12、P14、P21、P4の7本が主柱となろう。他にも多くの柱穴があるので建替えが行われた可能性もある。

住居址の中央部分には土器が十数個体入っていた直径約1m、深さ1.2mの1号土坑があるが、検出状況から本址には伴わないと考えられる。なお、主柱穴の一つと思われるP1内からほぼ完形の土器が1個体出土しており、大いに注目された。

本址は、住居内出土土器から、縄文時代中期中葉Ⅲ（藤内Ⅰ）期と考えられる。

遺物 典型的な吹上パターンを呈する住居址であり、非常に多くの土器が出土している。時期的には中期中葉Ⅲ期が主体的にみられ、出土土器の年代幅はそれほど長くはないと思われる。

これらの多くの土器に混じって土偶も3点出土しており、このうち1点がJ-30・32・33号住居址と複数住居址間で接合しており注目される。また、ミニチュア土器も10点以上出土するなど、他の住居址とは遺物の内容も異なっている。これ以外にも市内遺跡では非常に珍しい土錘や石錘もみつかり、縄文時代の生業の一端を垣間見ることができる貴重な資料である。

石器も豊富で、石錘以外に石鏃、石匙、石錐、打製石斧、磨製石斧、石皿、磨石・凹石など多種に及んでいる。



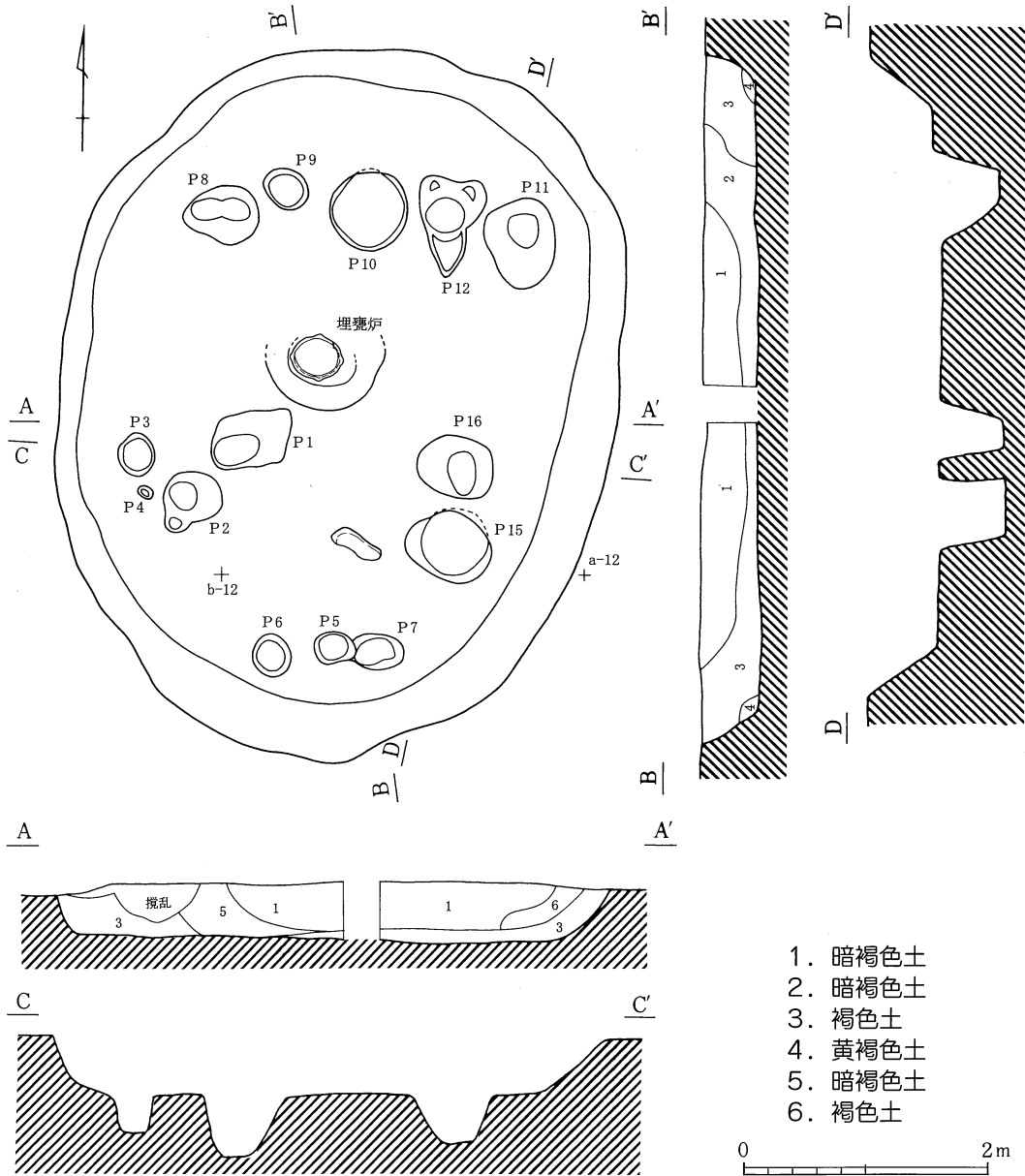
J-31号住居址土器出土状態
夥しい量の土器が覆土中より出土



J-31号住居址出土土器
前列右から2番目がP 1から
出土した縄文のみ施文した土器



J-31号住居址出土石器



第10図 J-32号住居址

J-32号住居址 (第10図)

遺構 本址は調査区の中央東寄りに位置している。検出時から遺物の出土が多く、住居址範囲を確認後、東西、南北にベルトを設定し住居の掘り下げを行ったが、吹上パターンを呈していたため、やはり遺物の出土が著しく、掘り下げには苦慮するほどであった。

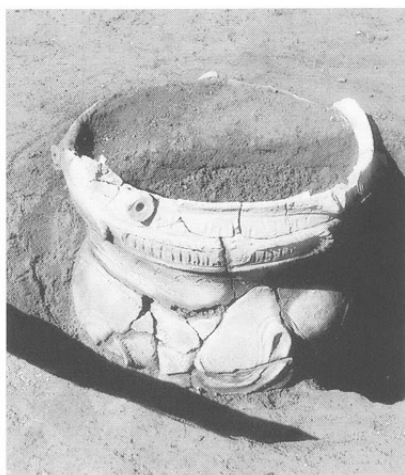
掘りあがった住居址は南北5.9m、東西4.5mの楕円形を呈する住居址であり、周壁はやや傾斜をもって掘り込まれ、暗褐色土層の確認面までの壁高は45~50cmとなっている。周溝などは確認されなかった。床面は平坦で堅緻であり、住居中央付近には埋壺炉があった。住居内には15本のピットが残され、本址においても建替えが行われていたようである。1期がP1、P9、P12、P16が支柱穴で、2期になると住居が南側に拡張され、P2、P5、P6、P7、P8、P11、P15などが支柱穴として使用されていたとも考えられる。



J-32号住居址



J-32号住居址土器出土状態
夥しい量の土器が住居址覆土から出土した



J-32号住居址埋甕炉

また、住居址中央の南寄りの床面上に長さ40cm、幅15cmの台石とも立石とも考えられるような石が残されていた。

本址は、炉体土器から判断して、縄文時代中期中葉Ⅱ（新道）期と考えられる。

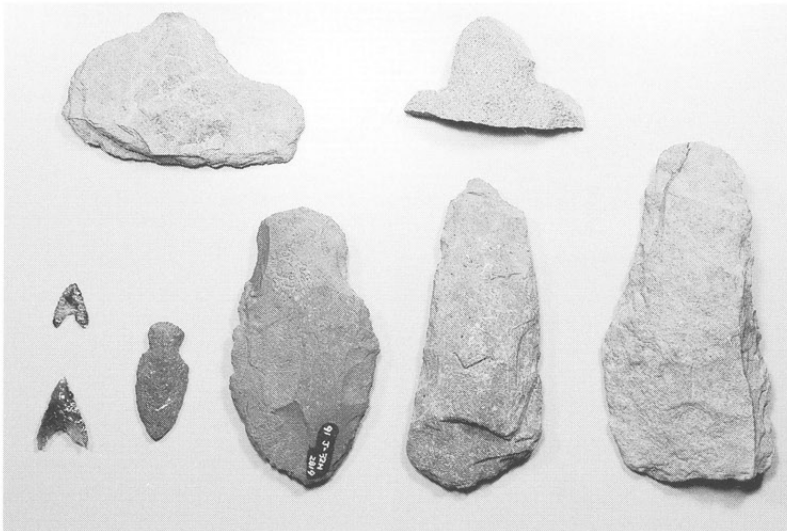
遺物 本址は吹上パターンを呈する住居址であり、今回の調査の中でも最も多くの遺物が出土し、遺物取り上げ番号も3000番にも及んだ。土器は覆土内にレンズ状に堆積した暗褐色土層中を中心にまとまってみられた。まだすべての接合作業が終了していないため出土土器の個体数などは明らかでないが、相当数になることは間違いない。これらの土器は廃棄された期間が長いいためか、中期中葉Ⅱ～Ⅴ期と幅広い時期に及んでいる。このなかには顔面装飾付土器なども含まれている。また、炉体土器に使用されている土器は、群馬県周辺に分布の中心がある新巻類型とよばれるもので、市内からこれまでに発見されたことはなく、非常に珍しい土器である。しかし、この炉体土器は遺構の施設の一部という観点から図・写真の記録作業後、住居址とともに埋め戻された。

土製品では、既述のように本址から出土した土偶のうち2点が他の3軒の住居址から出土した土偶と接合するなど注目すべき成果を残した。なお、本址からは合計7点もの土偶が出土している。土偶以外にもミニチュア土器、土鈴、スプーン形土製品など出土品のバリエーションは豊富である。

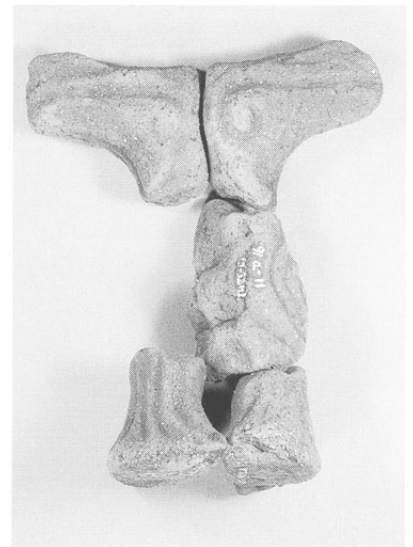
石器では石鏃、石匙、打製石斧などがある。



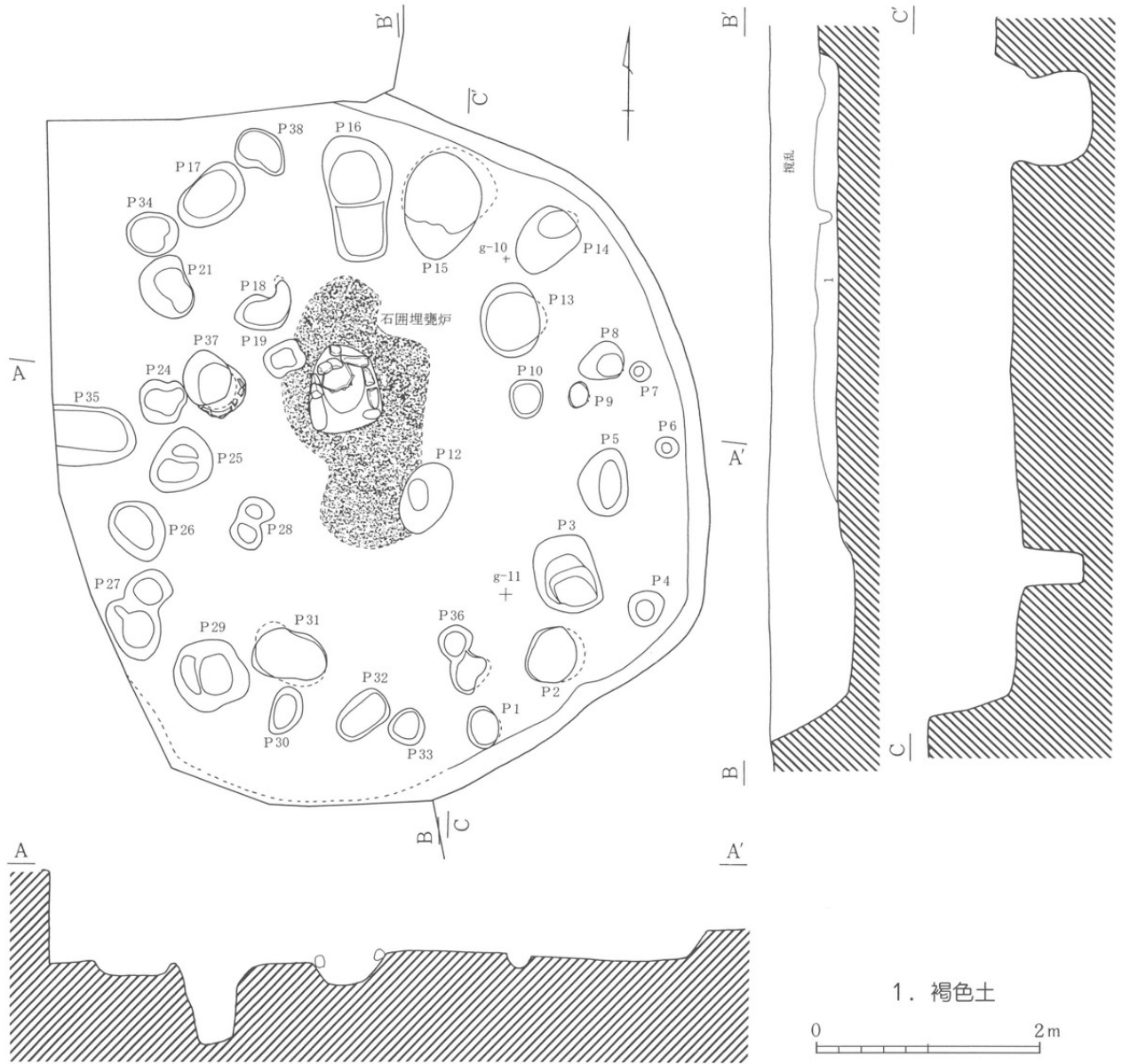
J-32号住居址出土土器



J-32号住居址出土石器



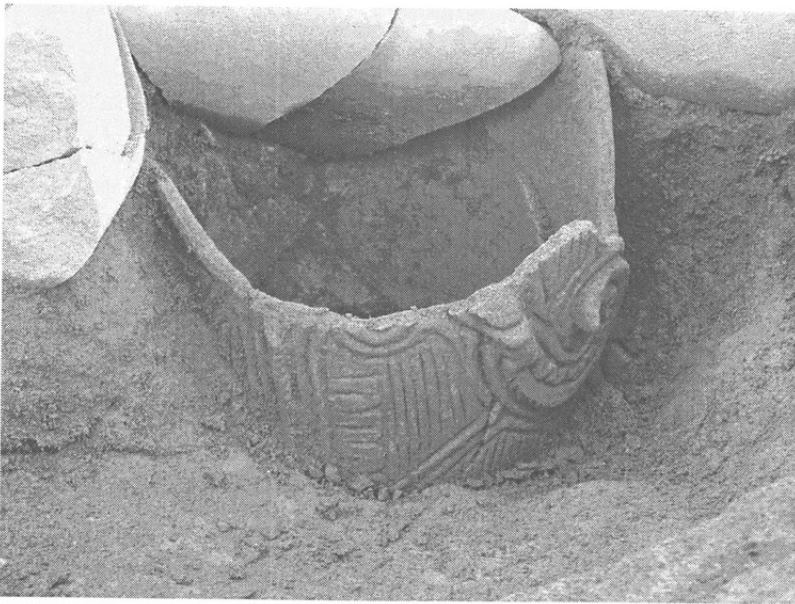
J-30号（右足）、J-31号（右手）、J-32号（右手・胴）、J-33号（左足）の接合した土偶



第11图 J-33号住居址



J-33号住居址



J-33号住居址石囲炉埋甕炉

J-33号住居址（第11図）

遺構 本址は調査区の中央西寄りに位置し、前年度に行った遺構確認調査で存在が確認されていた住居址である。調査区を西側に拡張して住居全体の範囲を確認した後、掘り下げを行った。西側半分の上層土は攪乱を受けており、遺物の出土は少ない。

住居内は40ヶ所ものピットが円形に取り囲むように検出され、床面の起伏が激しい。規模は南北6.0m、東西6.0mの円形と推定される。これらピットの中で支柱穴と特定できるものは難しいが、P2、P5、P14、P16、P21、P26、P29、P32の8本が考えられる。壁は東半部のみ検出され、ロームを掘り込んでおり、立ち上がりは急で、壁高は25cmである。

炉は中央に石囲埋甕炉、北側に埋甕炉が検出された。前段階で使用されていた北側の埋甕炉はP37に切られているため、炉体土器の一部のみ残されている。新段階の石囲埋甕炉は、石で囲った炉の内部に胴部より上を欠いた深鉢形土器を埋設しており、周囲には焼土が広がっている。炉石は当時方形に配されていたと思われるが、南側半分は欠失している。

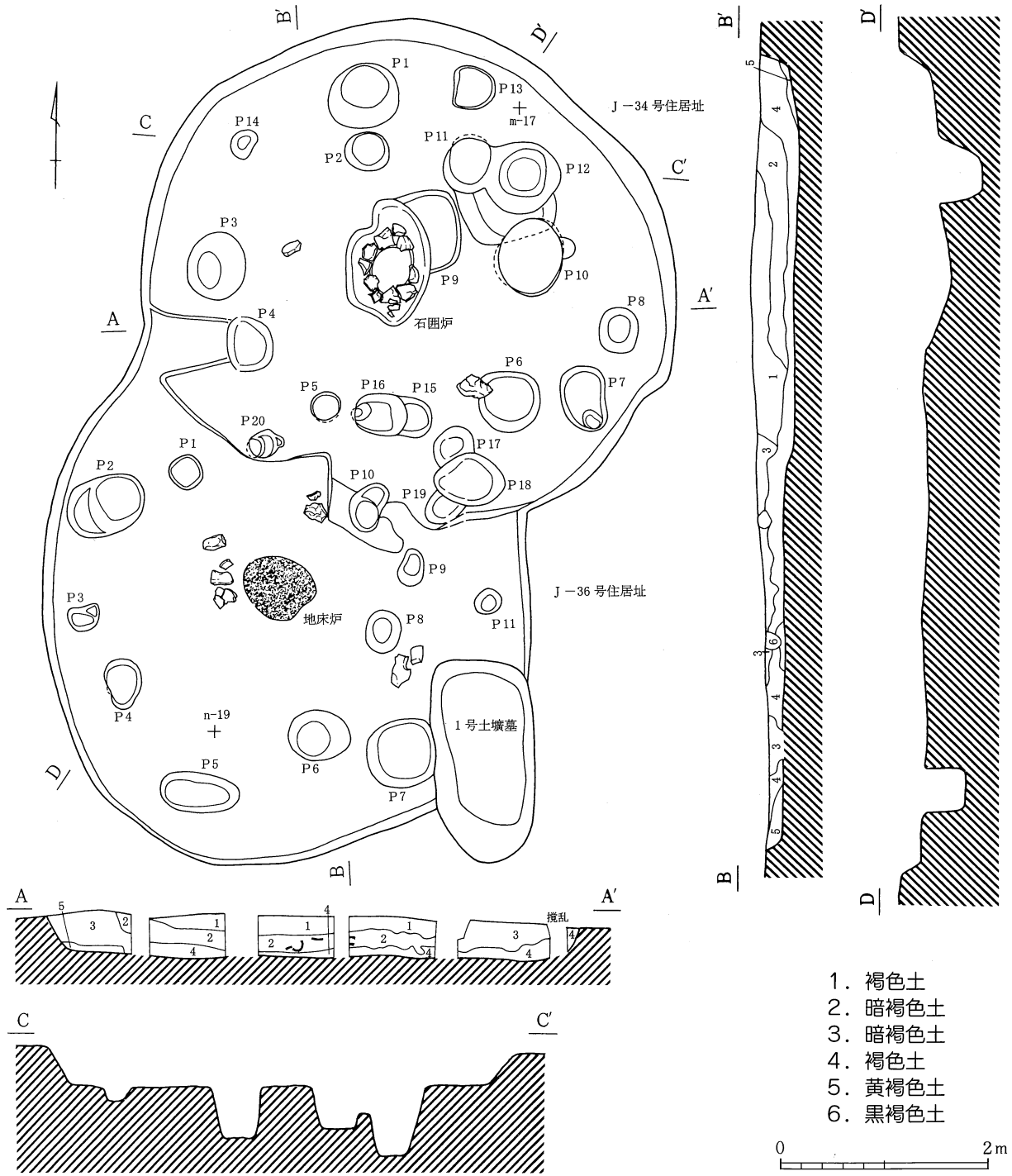
本址は炉が2基出土していることから建替えが考えられるが、西側部分が著しい攪乱のため埋甕炉を使用していた古い住居址のプラン等については確認できなかった。

埋甕炉および石囲埋甕炉の炉体土器から縄文時代中期中葉V（井戸尻I）期に比定できる。

遺物 非常に遺物の少ない住居址であるが、埋甕炉および石囲埋甕炉の炉体土器には中期中葉V（井戸尻I）期の土器が使われていた。

土偶が1点出土しており、J-30・31・32号住居址のものと接合している。

石器では打製石斧、磨製石斧、不定形石器がみられるが、土器同様に数的には少ない。



第12図 J-34・J-36号住居址

J-34号住居址 (第12図)

遺構 本址は調査区の南西に位置し、南側をJ-36号住居址と重複している。J-34号住居址が36号住居址を切っている。

34号住居址は南北4.8m、東西5.2mのほぼ円形を呈している。床は平坦で壁の高さは40~45cmである。

住居の中央には10個の石を円形に囲んだ石囲炉があり、内部には焼土が詰まっている。床面上にはピ



J-34号住居址（手前）
J-36号住居址（奥）



J-34号住居址出土土器

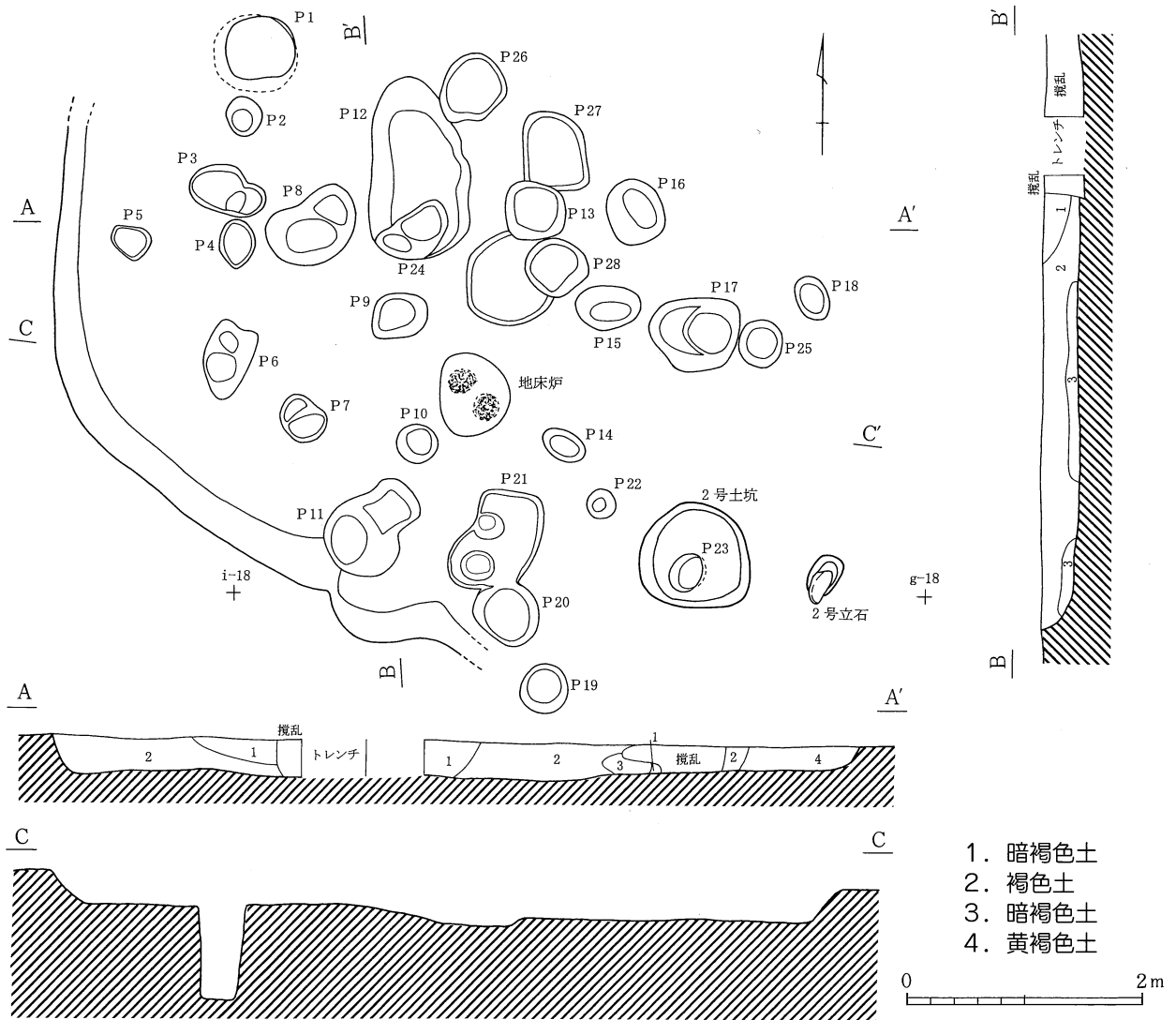
ットが多く発見されているが、主柱穴と思われるものは、掘り込みが50~70cm 前後と深いP 1、P 3、P 8、P 19の4本が該当すると思われる。

住居の時期は縄文時代中期中葉V（井戸尻I）期のものと考えられる。

遺物 中期中葉V期の土器が比較的まとまって出土している。特に器面全体に刺突を施すという特異な文様を施文した土器が、復元された5点の土器のうち3点もあり、大変興味深い。

土偶も3点出土しており、このうち1点は平成13年度の試掘調査で出土した土偶と接合した。なお今回の接合した土偶は出土地点に20m ほどの距離がある。

石器では、石皿、敲石、不定形石器があり、特に石皿は小形であるが見事な完形品である。



第13図 J-35号住居址

J-35号住居址 (第13図)

遺構 本址は調査区中央西側に位置して発見されたが、攪乱が著しく、南・西壁の一部と炉・床などを残すのみである。炉、柱穴の配置から南北5.0m、東西6.0mの楕円形を呈する住居址であろうか。

床面には全体的にピットが散在しているため、凹凸が激しく、それほど堅くない。残存している壁はローム層まで掘り込まれ、壁高は約30cmで、立ち上がりは急である。

住居内には約30のピットが掘り込まれており、そのうち主柱穴と思われるものは、深さ60~80cmのP6、P8、P13、P11、P17、P23の6本が該当する。

炉は住居中央に焼土を伴った掘り込みがあることから、地床炉であったと考えられる。なお、本址の時期は、出土遺物などから縄文時代中期中葉Ⅲ（藤内Ⅰ）期のものと推測される。

遺物 本址から出土した遺物の出土量は大変少ない。主体となる時期は縄文中期中葉Ⅲ（藤内Ⅰ）期であるが、中期後葉Ⅰ期の土器もまとまってみられる。土偶も1点出土している。



J-35号住居址



J-35号住居址出土土器

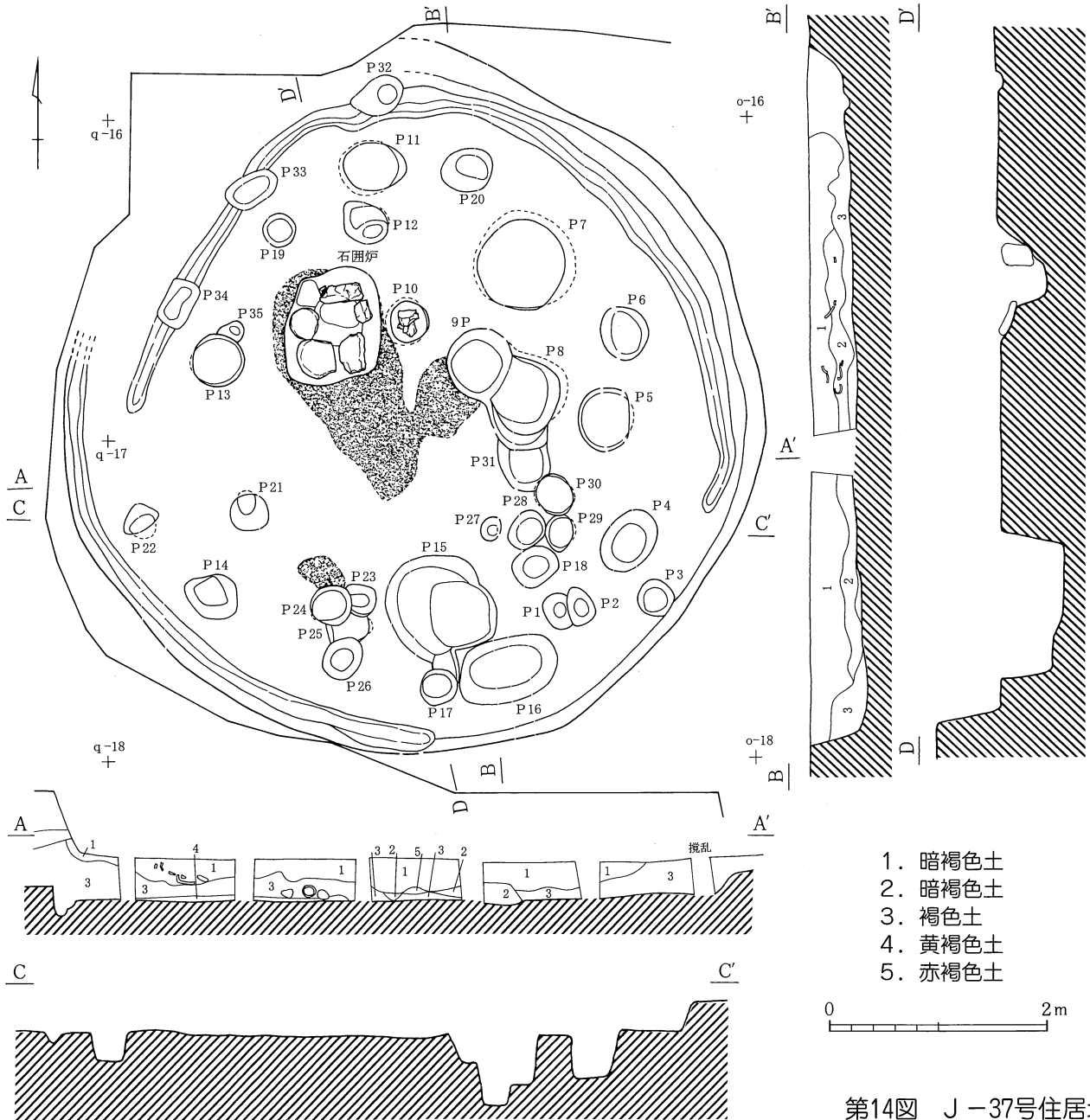
J-36号住居址（第12図）

遺構 本址は調査区の南西にあり、北側をJ-34号住居址に、南東を平安時代の土壌墓に切られている。直径4.8mの円形を呈する住居址と推定され、床は平坦であるが状態は悪く、北側の一部に堅い床面がわずかながら残されている。壁の高さは15~20cmとなっている。

中央には焼土の広がりが見られることから、地床炉であったと考えられる。主柱穴は深さ30~40cm前後のP2、P4、P6、P8、P10、P20の6本が考えられる。

住居の時期は出土土器から縄文時代中期中葉と考えられるが、出土量が少ないため断定はできない。

遺物 本址は大変遺物が少ない。中期中葉の土器がわずかに出土しているだけである。目立ったものとしては完形の石皿がある。石器では他に敲石と磨石が出土している。



第14図 J-37号住居址

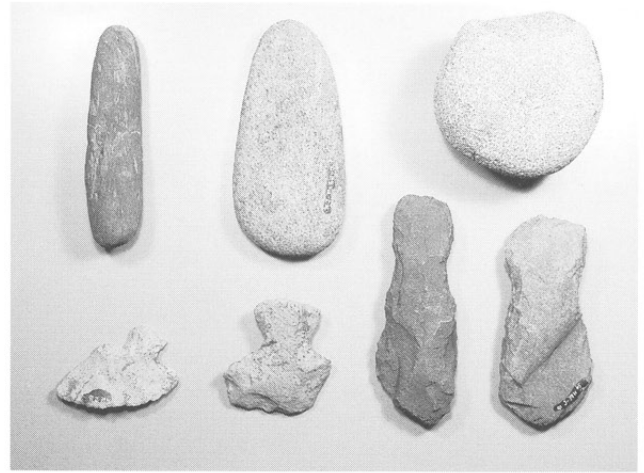
J-37号住居址 (第14図)

遺 構 本址は調査区の南西隅に位置している。調査区の端にあたり、当初は住居址の1/4程度しかプランを確認できなかったが、検出時においても遺物が多く出土することもあり、積みあがった廃土を移動させて住居址の全体を掘ることにした。

検出された住居址の規模は、住居址の西側部分が他の住居址と切りあってしたが、周溝の位置などから推定し、南北6.5m、東西6.5mの円形プランであったと考えられる。残された周壁は20~40cmと暗褐色土層から垂直に近くしっかりと掘り込まれており、床面も平坦で堅緻なものであった。周壁の際には周溝が廻っているが、東南部分は周溝がなく、逆に北西部分は周溝同士が繋がらずに部分的に二重になっている。本址の西側に接して、その存在が確認された住居址に関しては、その大半が調査区域外であり、かつ時間的余裕もなかったことから拡張作業などは行わなかった。よって詳細は不明である。



J-37号住居址



J-37号住居址出土石器



J-37号住居址出土土器

住居址中央付近には大きめの石を使った石囲炉があり、周囲には南側を中心に焼土が確認された。住居内にはピットが35ヶ所あり、本址においても建替えが行われたことが予想される。ピットの形状や深さから、P 4、P 6、P 14、P 17、P 20、P 33、P 34が支柱穴として使用されていたと思われる。

本址は、住居内出土土器から、縄文時代中期後葉Ⅰ（曾利Ⅰ）期と考えられる。

遺物 本址も住居址中央部分を中心にして、吹上パターンを呈するような遺物の出土が確認された。出土した土器はほとんどが縄文中期後葉Ⅰ期に比定されるもので、該期の良好なセットとしてとらえられる。石器では石匙、打製石斧、磨石・凹石、敲石などがみられる。



J-38号住居址

J-38号住居址出土土器
(左 炉体土器 右、埋められていた台付土器)



J-38号住居址 (第9図)

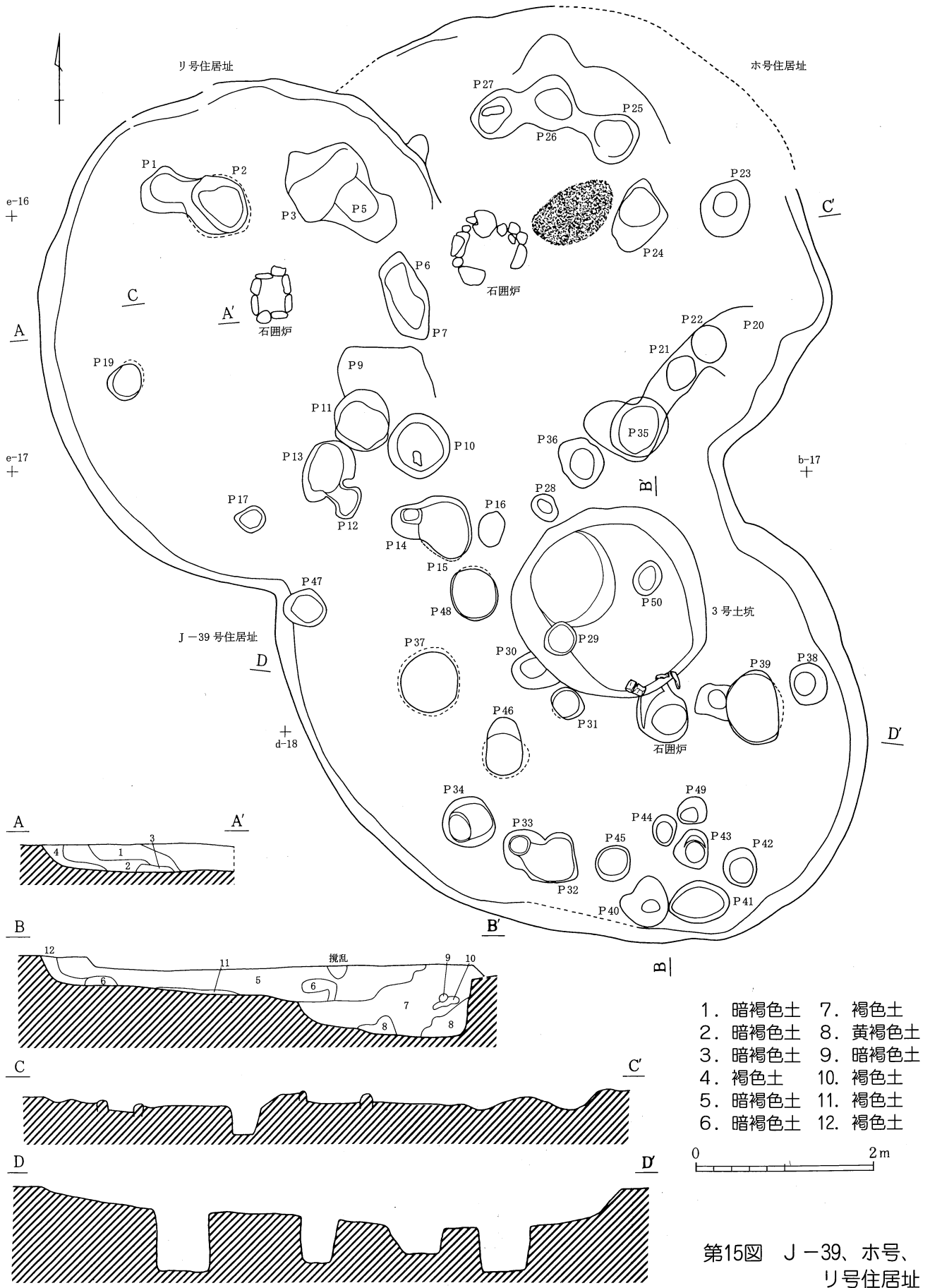
遺 構 本址は調査区の中央やや南寄りに位置し、J-31号住居址を切るように作られている。この住居址は周囲が攪乱により壊され、かつ住居址自体の掘り込みが浅いことなどいくつかの要因が重なり、当初の検出作業では確認することができなかった。しかし、J-31号住居址の調査において貼床の存在が確認されたことから、再度検出作業を行い確認するにいたった。よって明確な周壁は部分的にしか残っておらず、住居内に関しても攪乱が入っており、調査は困難であった。

住居址の規模は、南北5.5m、東西5.5mの円形プランと推定される。住居址中央には石囲埋甕炉があり、炉の南東側に焼土が残されていた。また炉端から南に30cmの位置に完形の台付土器が埋められており、注目された。炉を中心とした場所の床面は平坦で堅緻なものであったが、それ以外の場所では攪乱の影響などもあり、しっかりした床を確認できなかった。柱穴についても明確な支柱穴の特定にいたっていない。

本址は、炉体土器などから、縄文時代中期中葉V(井戸尻I)期と考えられる。

遺 物 遺物は少なかったが、炉体土器など時期を特定できるような資料に恵まれたことは幸いであった。炉体土器は、他の住居址にみられたような口縁部から胴上半部にかけての土器を使用しているのではなく、胴中央部の土器の最も膨らんだ部分を使用していた。炉の南側に埋められていた土器は、高さ2.5cmの台付土器である。土製品では土製円盤が出土している。

石器は石鏃、石錐がある。



第15図 J-39、ホ号、リ号住居址



J-39号住居址（手前）
ホ号住居址（奥右）
リ号住居址（奥左）

J-39・ホ・リ号住居址（第15図）

遺構 この3軒の住居址は調査区南側に位置しており、それぞれが重複している。切り合い関係から考えて建てられた時期は、古い順にホ号、J-39号、リ号住居址となる。

このうちホ・リ号住居址に関しては、昭和26年度の発掘で一度調査された住居址であり、今回再調査を行った。

ホ号住居址は西側、南側をそれぞれリ号、J-39に切られているが、残部の形状から円形あるいは楕円形を呈すと思われる。床は比較的しっかりしているが、壁の立ち上がりの痕跡は不明瞭で確認しがたい。過去の調査時に凶化されたように、住居内部からはピットや石囲炉が検出された。

リ号住居址は過去のトレンチ調査では一部が調査区外であったためその全体が確認できなかったが、今回の調査により推定南北5.6m、東西4.7mの楕円形を呈していることがわかった。床・壁ともに状態は良く、ロームを掘り込んだ壁の高さは30cmで立ち上がりは急である。ホ号と同様に、住居内からは石囲炉、炭化材、ピットが検出された。炭化材は昭和26年の調査で未調査であった住居址西端から出土した。

J-39号住居址は北側が上記2軒に重なっているが、過去の調査でも未確認の住居址で、南北6.8m、東西5.2mの楕円形を呈する。重複や大形土坑の掘りこみにより、遺存状態は悪い。

床はしっかりしており、壁は高さ30cmで立ち上がりは急である。炉は石囲炉で、石の一部が残されている。炉底は27cmの掘り込みとなっている。

住居内では多数のピットが検出された。深さ50～60cm前後のP36、P48、P33、P40、P42、P38が主柱穴に該当しようか。

時期は昭和26年の調査報告書によるとホ・リ号住居址が縄文時代中期中葉とされている。J-39号住居址は出土遺物から縄文時代中期中葉V（井戸尻I）期に比定できる。



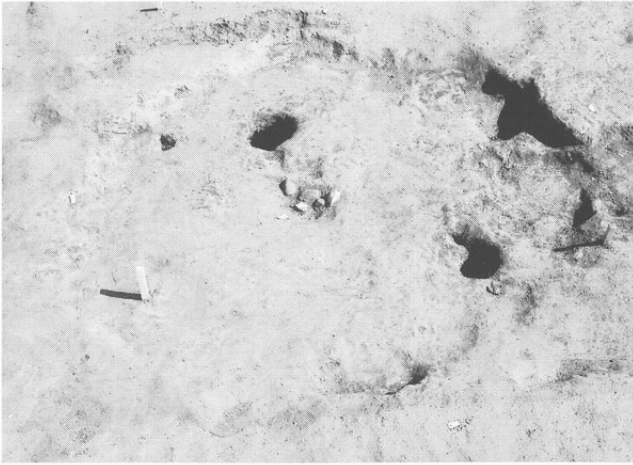
J-39号住居址出土土器



J-39号住居址出土石器

遺物 今回始めて調査の手が及んだJ-39号住居址出土の遺物について述べることにする。J-39号住居址からはまとまった土器が出土している。時期的には中期中葉V（井戸尻I）期がほとんどである。土偶も1点出土している。

石器も比較的多くみられ、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、磨石・凹石、不定形石器などが出土している。



へ号住居址



チ号住居址



H-25号住居址

既発掘住居址の再調査

今回調査が行われた区域は、昭和26年にI・Kトレンチにより調査された場所に一部が該当する。そこで、当時調査されたチ号、へ号、ホ号、リ号、H-25号住居址を再調査することとなった。

チ号住居址は過去の調査で、楕円形のプランを呈し、住居内には4つの柱穴、中央北寄りに掘り窪みがあることが確認されていた。今回の調査でもそれらは確認できたが、新たに東部壁面に大きなピットが検出された。直径52cm、深さ33cmで、内部からは土器が出土している。このピットはその大きさ・深さから考えて柱穴であると推定されるが、他の4つの柱穴とは外れた位置にあるため、さらに検討の余地がある。

へ号住居址は直径5mの円形を呈す住居で、既発掘の再検討を促すような新発見は得られなかった。

また、H-25号住居址では、再調査によって床面上に未発見の小ピットが7ヶ所新たに検出された。

他にも、前述したように未完掘であったリ号住居址を完掘できたことによって、その全体像がつかむことができた。



1号立石
土壇に落ち込むようにして出土
前方に見えるのは大洞山



2号立石
J-35号住居址の東側より検出された立石
当時のままに地面に立った状態で出土



平安時代の1号土壇墓
J-36号住居址と重複して発見された。
1.8m × 1.0m の楕円形を呈し、北端に土
師器、黒色土器の坏が副葬されていた。

6 縄文時代の古環境と食糧等への利用状況

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

今回は、古植生や食料・燃料材への利用等に関する情報を得るため、住居跡や炉跡覆土等を対象に、花粉分析（概査）、植物珪酸体分析、微細遺物分析を実施した。また、年代資料を得るために、炉跡から出土した炭化材の樹種同定と放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した。その概要を以下に述べる。

(2) 住居跡の年代

測定の結果、 $4,210 \pm 40\text{BP}$ (IAAA-30563) の年代値を得た。また、測定値は（同位体補正のない値） $4,310 \pm 40\text{BP}$ であり、 $\delta^{13}\text{C}$ の値は -31.00 ± 0.77 である。LIBBY の半減期5,568年を使用し、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）、誤差は標準偏差（One Sigma）とした。この炭化材試料が出土した住居跡は出土遺物から縄文時代中期と見られるが、今回得られた年代値はこの考古学的所見に調和的である。

(3) 古植生と植物の利用状況

植物珪酸体分析結果では、タケ亜科とウシクサ属の割合が高かった。タケ亜科は主に山地に生育したササ林、落葉広葉樹林の林床に生育したササ類、台地上のネザサ類な等に由来すると思われる。ウシクサ族（ススキ属など）は炉跡覆土から高率に検出され、細胞列も多く確認された。当時ススキ属が住居内で燃料材として使用されていたと推定される。また、花粉分析試料の残渣中には、微細な炭化物（微粒炭）が多く認められた。現在のところ微粒炭の母植物を推定することは難しいが、現生植物を用いた実験結果（小椋、2001等）より、今回検出されたのはイネ科植物体を燃焼させた場合に似ており、生活資材としてススキ属を利用するために遺跡周辺で野焼き等により維持管理されていた可能性もある。なおススキ属は縄文時代以降の住居上屋材への利用が知られており、他に生活資材への利用も想定される。

微細遺物分析では、オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *Sieboldiana* (Maxim.) Kitamura：クルミ科クルミ属）の核が検出された。オニグルミは堅果が脂肪分に富み生食・長期保存可能で収量も多いため、古くから里山で保護されてきた。本種は谷筋など適湿の場所に生育する落葉高木で、周辺の現地形・現植生からみて、当時も入手しやすかったと考えられる。

住居構築材に由来する可能性がある炭化材の樹種は、全て落葉広葉樹のクリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.：ブナ科クリ属）であった。クリは、重硬で強度および耐朽性に優れた材質を有する。県内ではこれまで郷土遺跡、屋代遺跡群等で縄文時代住居構築材について樹種同定が行われ（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993；高橋、2000）、クリが多い結果が得られている。これより、本遺跡でも当時クリを主とした木材利用が行われていた可能性がある。今後周辺におけるクリ栽培などについても、同様の分析調査に加え低地堆積物の花粉分析等を実施、資料を蓄積し、明らかにしていきたい。

引用文献

- 小椋純一（2001）微粒炭の形態と母材植生との関係（3）、京都精華大学紀要、20、p. 32-50。
 パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）郷土遺跡出土炭化材の同定。「小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書 第16集郷土一長野県小諸市郷土遺跡発掘調査報告書一」、p. 52-57、小諸市教育委員会。
 高橋 敦（2000）炭化材の樹種。「長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書51 上信越自動車道埋蔵 文化財発掘調査報告書24ー更埴市内その3ー更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含大境遺跡・窪河原遺跡）ー縄文時代編ー本文」、p. 249-253、日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター。

7 「縄文の村」地区の整備計画

今回の発掘調査は、平出遺跡整備の資料を得ることを目的としている。整備計画策定にあたっては、塩尻市史跡平出遺跡整備委員会により検討が加えられてきた。以下「縄文の村」地区整備計画を中心に概要を述べたい。

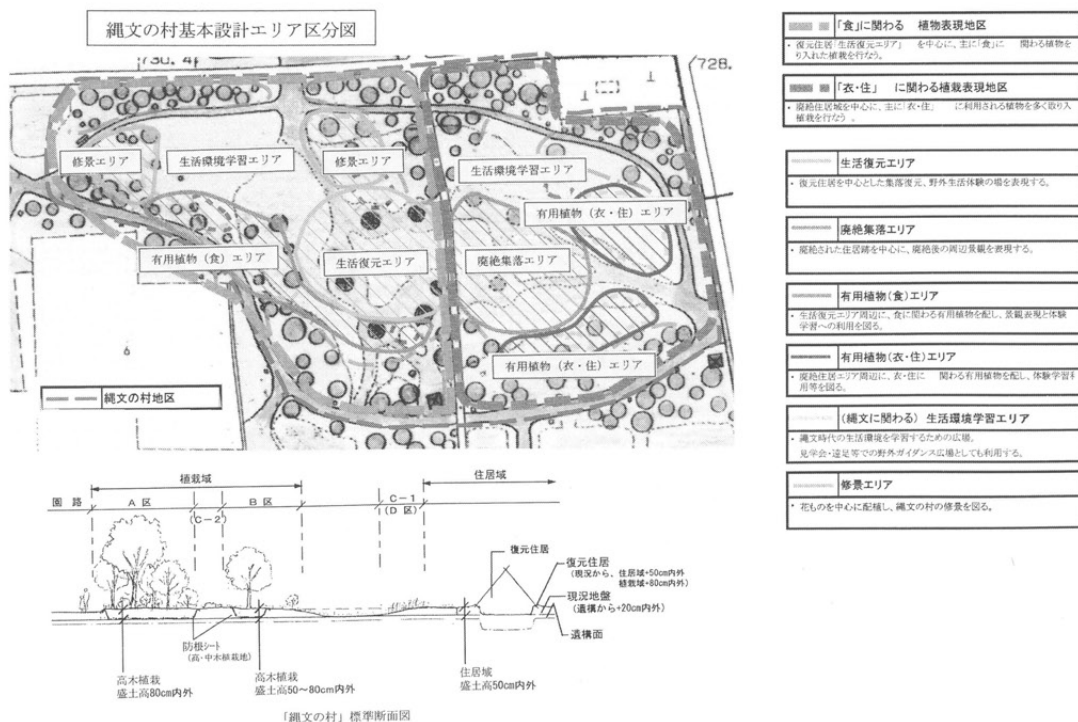
(1) 整備基本計画

平出遺跡の環境整備は「五千年におよぶ『平出の地』」をテーマとしている。縄文時代から現代まで歴史が重層する平出の地にあって、縄文や古代の人々が自然の中でどのような生活を送ってきたのかを再現整備することにより、人々に親しみをもって活用される整備を目指している。整備では平出遺跡の特徴を生かし、「導入部」「ガイダンス地区」「縄文の村」「古代の農村」「体験施設地区」の5地区を設定している。



「縄文の村」完成イメージ図

「縄文の村」地区の基本計画では、縄文時代中期の集落景観を再現することとしている。西側に復元住居を中心に当時の生活の様子を窺うことのできる生活復元エリア、東側を廃絶住居を再現した廃絶集落エリアとし、生活が追体験できる場所として整備を行う。(縄文の村基本設計エリア区分図)



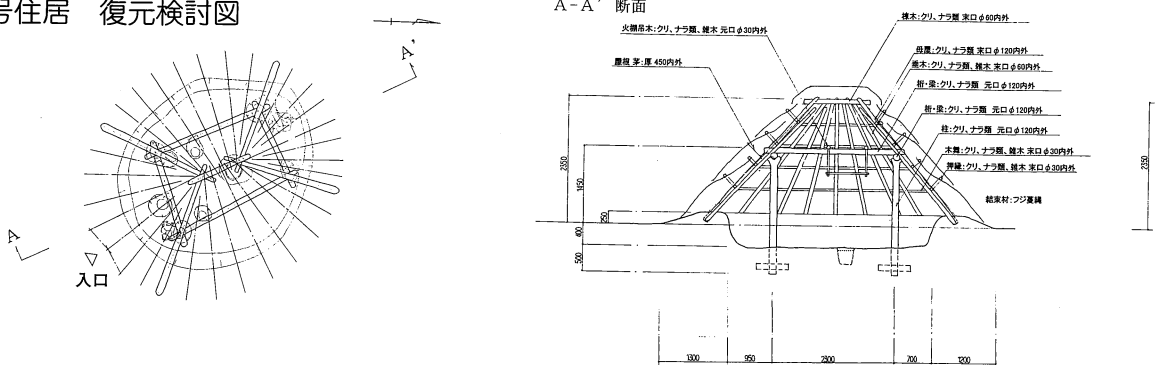
今回の発掘調査では、猪沢期・新道の住居址が6軒発見されており、また、昭和60年以前の調査で同時期の住居址が7軒確認されている。集落の全体像は平成16年度の発掘調査を待つことになるが、猪沢・新道期の集落構造がある程度明らかにできるものと考えられる。且つ該記の住居址の遺存状況も良いことから、整備対象時期を新道期とした。

現況面から遺構面までが遺跡全体を通じて比較的浅いことから、整備にあたっては遺構面の保護を最も重視し十分な保護層を設ける計画である。（「縄文の村」標準断面図）

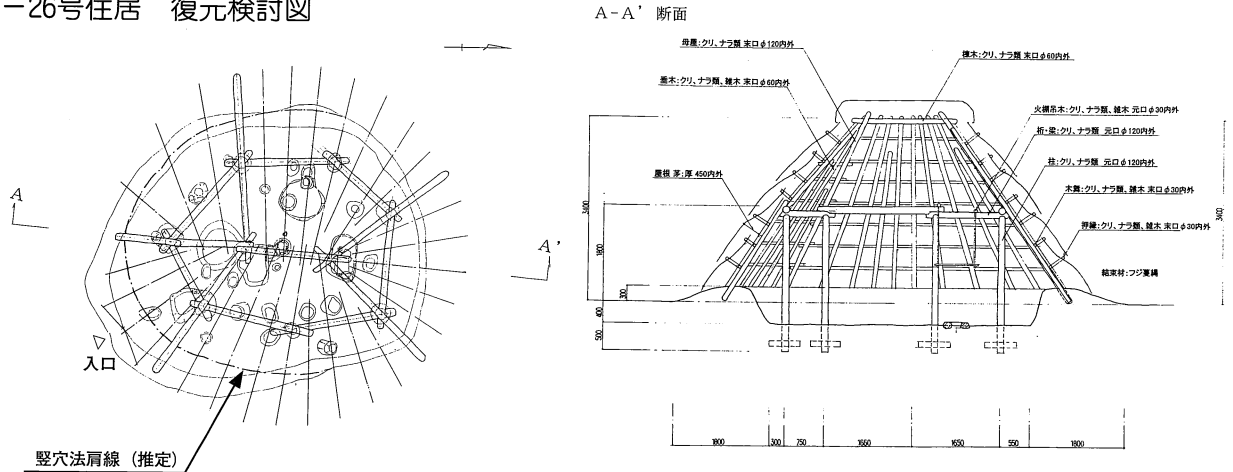
(2) 住居復元計画

本調査で確認された新道期の住居址5基のうち遺存状態の良いJ-25号住居址、J-26号住居址、J-29号住居址を復元対象とすることとした。復元住居の周辺から確認されている立石や火焚き跡等の遺

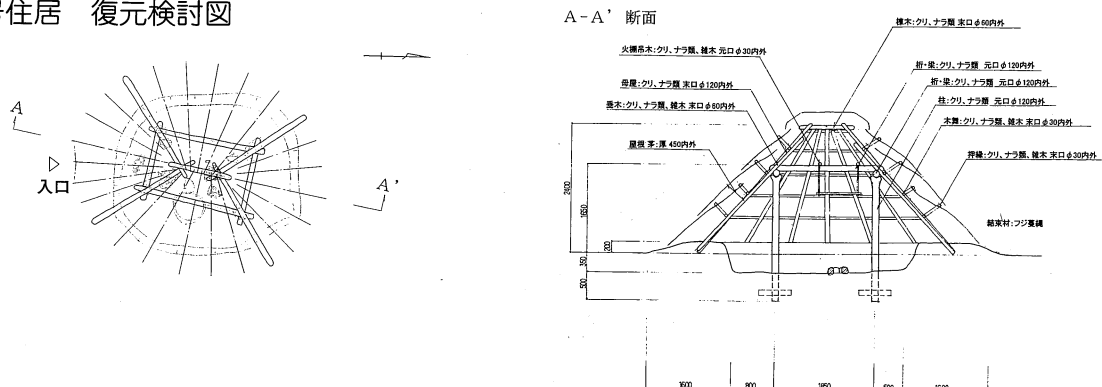
J-25号住居 復元検討図



J-26号住居 復元検討図



J-29号住居 復元検討図



構の復元も併せておこない、生活感のある集落復元を計画している。

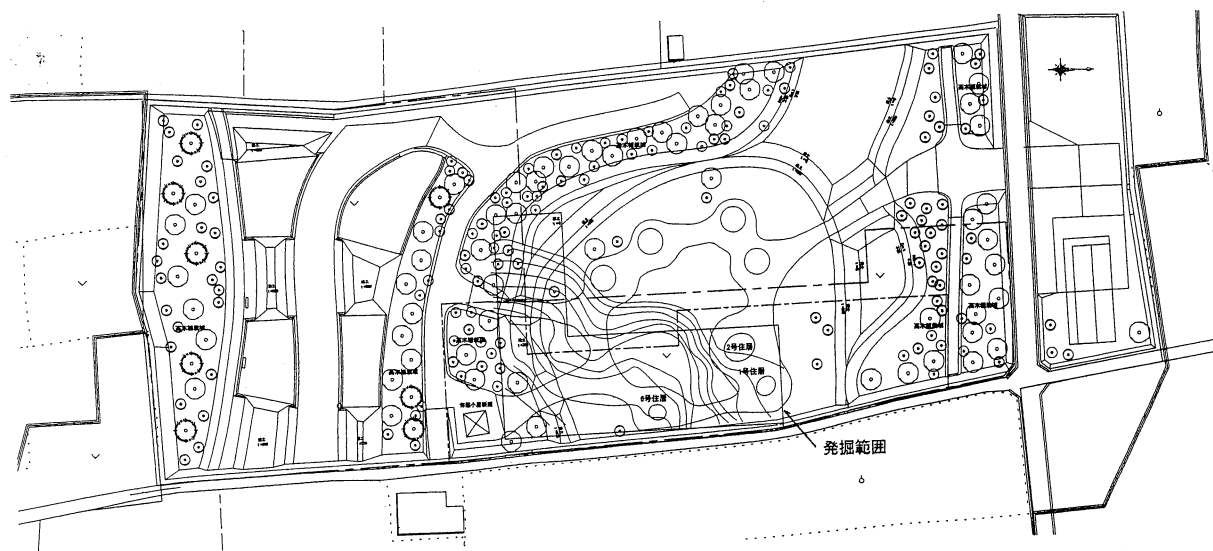
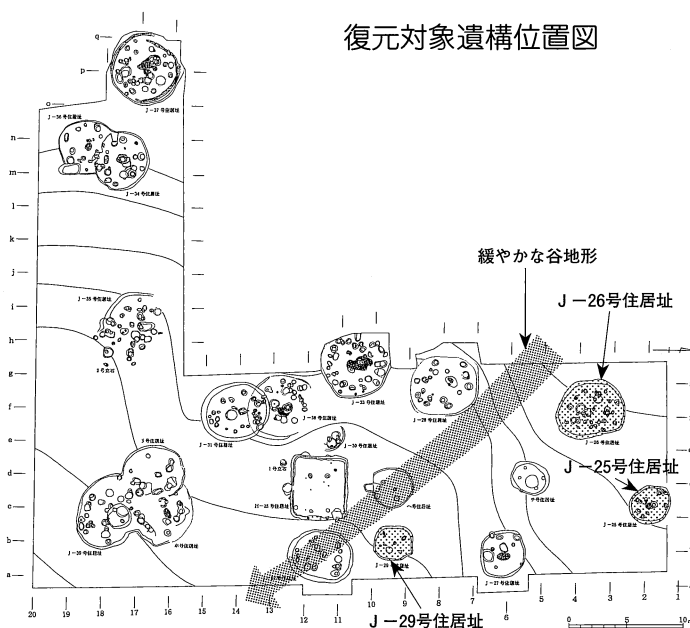
整備委員会での住居復元案の検討により、各住居址の基本的な復元計画が策定された。J-25号住居址は、比較的小形の竪穴住居で、寄棟・茅葺、柱は4本で煙出しは設けない。出入り口は南東側で、埋甕炉を中心部に設ける。J-26号住居址は、今回復元する3棟の住居の中では最も大きな住居である。寄棟・茅葺による竪穴住居で、柱は7本で煙出しは設けない。出入り口は南東側で、石囲炉は入口から奥まった位置に設ける。J-29号住居址は、J-25号住居址と同規模同形式の住居で、寄棟・茅葺、柱は4本で煙出しは設けない。出入り口は南側で、石囲炉を中心部に設ける。いずれの住居も、花粉分析によりウシクサ属（ススキ等）の産出が目立つことから、屋根を茅葺とした。また、柱材はクリ・ナラ類を使用する。住居内は火棚を設け土器類を配置し、縄文人の生活が追体験できるよう整備する。

(3) 地形復元計画

「縄文の村」の集落景観を復元する上で、当時の地形の復元を行うことは重要な要素であり、旧地形の確認を行うことは本調査における重要な目的のひとつであった。

発掘調査の結果、ほぼ平坦な景観が広がっている現況の地形に比べ、当時の地形は南東への傾斜が大きくなっていることが確認された（復元対象遺構位置図）。これは、平出の泉から流れ出た川が地形形成に影響していると考えられる。平出遺跡は平坦地に立地する縄文集落であるが、緩やかな起伏を有する当時の地形を確認できたことは大きな成果である。「縄文の村」の集落景観の整備を進めるための基礎的資料が得られたといえる。

復元対象遺構位置図



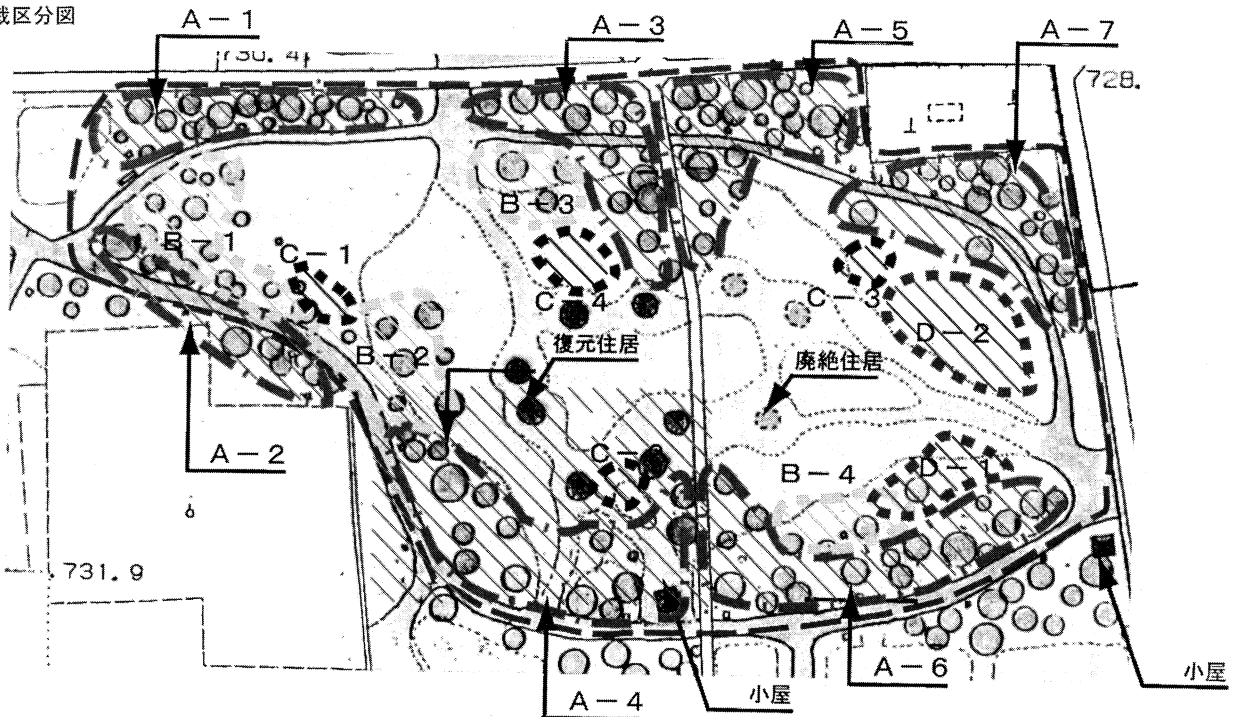
「縄文の村」整備平面図

(4) 環境復元計画

今回の調査では、縄文時代の環境を復元するため、花粉等の化学分析を行い樹種の選定を行うこととした。確認されたものとしては、オニグルミ、クリ、ススキ、ササで、個体数としては少ない。そこで、植栽の多様性を図るため、県内の他の遺跡で確認されている樹種も参考にして、できる限り当時の環境に近い植栽計画を策定することとする。計画する樹種は、高木ではオニグルミ、クリ、ミズナラ、クヌギ、トチ、コナラ、ミズキ、コブシなど、中低木ではムラサキシキブ、ヤマツツジ、サンショウ、アキグミ、ニワトコ、タラノキなど、草本類ではススキ、カラムシ、サクラソウ、ウバユリなどである。

植栽にあたっては、集落周辺はナラ・カバ類を中心した縄文の森、また、住居域を囲むように、クリ、オニグルミ、ヒョウタンなど食にかかわる有用植物、ススキ、カラムシなど衣・住にかかわる有用植物を配して、集落に近くなるにつれ人為的な景観になるよう計画する。(植栽区分図)

植栽区分図



■植栽区分図凡例

	<p>植栽地区 A (縄文の村、樹林帯(地区境界側))</p> <ul style="list-style-type: none"> 野生の有用植物を意図的に集落周辺に残した状態を表現する。ナラ・カバ類を一定の群(群)として配し、他の種類は混在した状態とする。 人為的な景観を表現する目的に沿い、木材として利用するために刈等を密に配植した地域(A-7)や樹林内に萌芽更新を行なっている樹木等を表現する。 植栽は、成長過程を来訪者に見せる学習的効果を重視し、各年ごと苗木(幼木)植栽を行なう。植栽は基本的に住民参加により行なう。 遺跡全体としての一体感を表現するため、他地区と隣接する樹林帯見直しを重視し、高木数を減らす等の植栽を租とする。(A-3,4,6地区)
	<p>植栽地区 B (縄文の村、樹林帯周辺(住居域側))</p> <ul style="list-style-type: none"> 有用植物を意図的に集落周辺に残した状態をより明確に表現する。樹林帯の住居側に、刈・オニグルミ・ミズナラ等を単木(または、2~3木単位)で配植する。 低木は、花もの・実ものを配する。(遺跡入口周辺(B-1地区)では、花ものを中心に植栽を行ないを表現する)

	<p>植栽地区 C (草本類(蔓類)の有用植物栽培地区)</p> <ul style="list-style-type: none"> 副次的食糧として、植物が栽培されている状態を表現すると共に、遺跡内での四季を表現するため花を群落的に配する。 C-1地区では、体験学習等の活用における利用を考慮し、ヒョウタン・ゴカイ等の栽培を行なう。(植物の特性を表現するため、C-1地区は腐朽木等による多様な捨場的表現を行なう) C-2~4地区については、住居域周辺に位置を固定せず各年で生育位置の決定を行ない、来訪者に散策の楽しみを提供すると共に土壌の劣化を防止する。
	<p>植栽地区 D</p> <ul style="list-style-type: none"> 衣・住を表現する地区として、ススキ・カラムシの植生域を設ける。
	<p>その他の地区</p> <ul style="list-style-type: none"> 自然な生育状況にまかせ、多様な樹種が混在した景観とする。但し、数年の生育状況より、特存種の優先化等で多様な植生の維持を阻害する場合は、その種を草抜き管理等で積極的に排除する。

8 ま と め

塩尻市では、平出遺跡の史跡整備を実施するにあたり、整備のための基礎資料を得るために継続的に発掘調査を実施することになり、平成14年度を初年度として調査に着手した。

平出遺跡は、昭和20年代に行われた第Ⅰ期発掘調査、昭和60年前後の中信平かんがい排水事業に伴う大規模な遺構確認調査の実施など、過去に何回にもわたって発掘調査が実施されてきた。しかし、これらの調査は全てトレンチによる発掘で、面的に広範囲を調査するものではなかった。昭和20年代の第Ⅰ期調査に続く第Ⅱ期調査ともいえる今回の調査では、初めて面的な発掘調査が実施されたことにより、トレンチ調査では確認できない多くの新たな成果を得ることができた。以下、その概要を述べたい。

1 「縄文の村生活復元エリア」に調査地域を設定し、縄文中期初頭1、猪沢期1、新道期5、藤内期2、井戸尻期5、曾利期1、中期中葉3、中期後葉1の計19軒、平安時代1軒の住居址が発見された。この地域が縄文中期の前半を中心とする多くの住居址が存在することが明らかとなり、縄文の村整備に必要な資料を得ることができた。また、発見された住居址のうち縄文中期4と平安1の5軒は昭和26年に発掘調査されており、今回再発掘となった。未発掘部分の完掘や未確認柱穴の検出など再検証の資料を得ることができた。中期前半の住居址は、既発掘住居址との配列状況から環状を呈するように見て取れるが、この点は今後の発掘調査結果を待ちたい。

2 出土遺物は、縄文中期土器・石器が大量に得られたが、特に、J-26・28・29・31・32・37号住居址では廃絶住居址への土器投棄（吹上パターン）が認められた。土偶の出土も多く、50点の中期土偶が出土し、J-30・31・32・33号の4軒の住居址間で土偶の接合関係が認められ注目される。

3 発掘調査は、地表面から手作業による掘り下げにより、耕作土下の褐色土層から住居址の掘り込みが観察され、当時の地表面に近い面を確認できた。この褐色土層では焼土・炭化物など火を燃やした痕跡も確認された。これにより整備時の遺構保護盛土を現地表面から50cm必要であることが確認された。

4 現在は、ほぼ平坦な地形であるが、上記の褐色土層面は東にむかって緩やかな窪地を形成していたことが判明した。この地域は、縄文中期には起伏に富んだ地形をなしていたことが明らかとなった。

5 植物珪酸体分析・微細植物片分析・炭化材同定などの化学的分析から、ススキ・クリ・オニグルミなどが検出されており、建築材・燃料材としてススキ・クリが活用され、オニグルミ・クリが食用に供されていたことが明らかとなった。この結果も整備における植栽の樹種選定に参考となろう。

6 史跡に指定され、保護されている遺跡を、破壊という側面をもつ発掘調査を実施するにあたり、今回は埋甕炉や立石など遺構に付随する遺物は採取せず、今後の再発掘での検証が可能となるようにそのまま埋め戻しを行った。整備の資料を得つつ、どこまで掘るかは難しい問題である。

発掘調査では多くの新知見が得られ、いまだ十分な整理・検討が行われていないので、本誌ではその概要を報告し、詳細は後日、本報告を刊行する予定である。

最後に、発掘調査に携わっていただいた多くの皆さんに感謝し、お礼申し上げたい。



小学生の発掘体験の様子



12月1日に行われた現地説明会



J-28号住居址に保護砂を入れた様子

史跡平出遺跡発掘調査報告書抄録

ふりがな	しせき ひらいでいせき							
書名	史跡平出遺跡							
副書名	平成14年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	小林康男・小松 学・塩原真樹・中野実佐雄							
編集機関	塩尻市教育委員会							
所在地	〒399-0738 長野県塩尻市大門七番町4番3号 / Tel.0263-52-0280							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらいでいせき 平出遺跡	宗賀388-2他	20215	146	36° 6′ 5″	137° 56′ 46″	2002 7.11~ 2003 3.28	1,500㎡	記念物保存修理事業（環境整備）に係る発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平出遺跡	集落址	縄文時代	竪穴住居址 中期初頭 1軒 中期中葉 16軒 中期後葉 2軒 立石 2基	縄文土器・石器 （中期初頭～後葉） 土偶・耳栓・土鈴・土 錘・スプーン形土製品	平出遺跡の縄文中期集落の様相の一端が明らかになった 土偶が大量に出土し、住居間接合するものもみられた			
		平安時代	竪穴住居址 1軒 土墳墓 1基	土師器・黒色土器	土器を副葬した平安時代の土墳墓を確認			

史跡 平出遺跡

—平成14年度記念物保存修理事業
（環境整備）に係る発掘調査報告書—
平成16年3月31日 発行

発行 長野県塩尻市大門七番町4番3号
塩尻市教育委員会

